

雲仙市文化財調査報告書(概報) 第1集

りゅう おう くら ち がわ
龍 王 遺 跡(倉地川古墳)

—国見中部地区県営圃場整備に伴う発掘調査概報—



2006

長崎県雲仙市教育委員会

発行にあたって

このたび平成16年度に実施しました雲仙市国見中部地区圃場整備事業に伴う龍王遺跡の緊急発掘調査の報告書（概報）を発刊することになりました。

龍王遺跡は雲仙市の北部に位置し、東側には土黒川、西側には倉地川が流れるなだらかな扇状地の水田地帯に所在します。古代条里制の痕跡が残る田園風景の中に遺跡が広がっており、当地より南側を望めば雲仙普賢岳がそびえ、頂上付近には平成新山と名付けられた溶岩ドームが噴火の生々しさを今に伝えています。また、北側に目を移せば、眼下には有明海が広がり、佐賀県・福岡県・熊本県までも一望することができます。

龍王遺跡からは、旧石器時代から中世までの幅広い時代の遺物・遺構が数多く発見されております。今回報告いたしますのは、調査において新規に発見された前方後円墳であります。当初遺跡内には古墳の所在はまったく想定しておりませんでした。龍王遺跡はその大部分が水田として利用されており、古墳と思しき痕跡はほとんどありません。発見された古墳は水田地帯の中に浮島のように残された「畠地」にありました。詳しく調べてみると、「その畠からは開墾時に巨大な岩が出て、庭石に運んでいった。」とのことでありました。おそらく調査では検出されなかった「石室」の一部でしょう。墳丘や石室はすでに消滅してしまっておりましたが、石室の床面、古墳周りの溝などははっきりと確認でき、空中写真などからもはっきりと鍵穴状の「前方後円墳」であると確認できます。石室内部からは鉄製品や勾玉などの副葬品が、古墳の周囲からは大量の須恵器が、また、少量ですが人骨も発見されています。発見された須恵器から古墳の年代を推測すると、島原半島では「最後に造られた前方後円墳」と考えられ、古墳時代の島原半島の歴史解明に大きな進展をもたらすものです。

「雲仙市」は平成17年10月11日、島原半島の北西部7町（国見町・瑞穂町・吾妻町・愛野町・千々石町・小浜町・南串山町）による合併で誕生しました。雲仙岳を主峰とする山々と緑豊かな農業地帯、また、豊饒の海である有明海・橘湾とともに新たな歴史を築いていきます。今報告が雲仙市として最初のものであり、旧町時代と同じくこれまでどおり祖先の貴重な文化遺産を保護し、これを後世に伝えることは、私たちに課せられた重要な責務であります。合併により大きく拡大した雲仙市のなかで、各地域の歴史の重要性・必要性はますます高まるものと考えられます。今後も貴重な文化財を保護し、地域の発展に寄与するべく事業に取り組んでいきたいと考えております。

最後になりましたが、今回の調査に当たり、地権者の皆様、工事関係者の皆様、大学・博物館関係の諸先生方ならびに長崎県学芸文化課のご指導に衷心より感謝申し上げ発刊のことばといたします。

平成18年3月31日

長崎県雲仙市教育委員会
教育長 鈴山勝利

例　　言

1. 本報告は2004年（平成16年度）に実施した国見中部地区県営圃場整備事業に伴う長崎県南高来郡国見町（現長崎県雲仙市国見町）に所在する龍王遺跡の緊急発掘調査の報告（概報）である。

2. 調査は国見町教育委員会（現雲仙市教育委員会）が担当した。

調査は2004年3月～4月に範囲確認調査を実施し、その結果をもとに下記の期間で発掘調査を実施した。

2004年8月4日～2005年3月21日（平成16年度） 1区～31区

2004年8月30日～2004年10月31日（平成16年度） 倉地川地区

3. 調査当時の体制は次のとおりである。

調査主体	国見町教育委員会	教　育　長	原　宮之
	同	教　育　次　長	吉田　正昭
	同	教育社会係長	柴崎　孝光
調査担当	同	社会教育係	辻田　直人
	同	文化財調査員	竹中　哲朗

4. 現地での遺構・遺物の実測は東文子・林繁美・寺中典子・深水聰子・福田次郎・竹田将人・竹中・辻田が行い、遺物の復元、実測、製図は竹中・織田健吾・早稲田一美・柳原亜矢子が行った。写真は現地写真は竹中・辻田が行い、遺物写真は竹中・織田が行った。

5. 遺構実測の一部は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。

6. 空中写真撮影業務は（株）九州文化財研究所に委託した。

7. 本遺跡の遺物及び写真・図面等は雲仙市国見神代小路歴史文化公園歴史民俗資料館で保管している。

8. 本書で用いた方位はすべて真北であり、国土座標は世界測地系による。

9. 現地調査および本書の発刊にあたって多くの方々からご助言ご協力いただき、記して謝意を表します。

小田富士雄（福岡大学）・宮崎貴夫・川道寛・古門雅高・本田秀樹・柚木亜貴子（長崎県学芸文化課）、渡邊康行（埋蔵文化財サポートシステム）、荒木伸也（長崎県南島原市教育委員会）、宇土靖之（長崎県島原市教育委員会）、長崎県島原振興局、長崎県教育委員会、国見町郷土史研究会、織田建設（順不同）

10. 本書の執筆は竹中哲朗・織田健吾が分担し、各章及び各節文末に執筆者を記した。

11. 本書の編集は竹中による。

目 次

卷頭図版

目次

本文

図版

第1章 龍王遺跡周辺の地理的・歴史的環境 1 p

　第1節 龍王遺跡の地理的環境（織田） 第2節 龍王遺跡周辺の歴史的環境（織田）

第2章 調査にいたる経緯 5 p

　第1節 前方後円墳発見の経緯（竹中） 第2節 記者発表・現地説明会（竹中）

第3章 調査の概要 7 p

　第1節 試掘調査の成果（竹中） 第2節 表面採集資料の紹介（織田）

　第3節 検出された遺構の概略（竹中）

第4章 方形周溝墓と前方後円墳 15 p

　第1節 調査区の設定と目的（竹中） 第2節 方形周溝墓（竹中）

　第3節 前方後円墳（竹中・織田）

第5章 土坑・掘立柱建物 52 p

　第1節 土坑墓と集石遺構（竹中） 第2節 掘立柱建物（竹中）

第6章 考 察 57 p

　第1節 倉地川古墳の概要（竹中）

　第2節 雲仙市国見町内出土同心円文当て具痕（竹中）

　第3節 龍王遺跡31区住居跡出土土師器の紹介（竹中）

　第4節 龍王遺跡発見の古墳時代前期豪族居館（竹中）

　第5節 龍王遺跡22区住居跡出土土師器の紹介（竹中）

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図(1/10,000)	
第2図	龍王遺跡周辺遺跡図(1/2,000)	3
第3図	調査区配置図(1/2,000)	4
第4図	龍王遺跡全体図(1/4,000)	7
第5図	真正寺条里跡第143号試掘坑 出土石器(1/1)	8
第6図	第101号試掘坑出土土器(1/3)	8
第7図	表面採集資料①(1/3)	8
第8図	表面採集資料②(1/3)	9
第9図	表面採集資料③(1/3)	10
第10図	表面採集資料④(1/3)	11
第11図	表面採集資料⑤(1/3)	12
第12図	倉地川地区検出遺構平面図(1/200)	14
第13図	方形周溝墓の調査区(1/200)	15
第14図	前方後円墳の調査区(1/200)	15
第15図	方形周溝墓実測図(1/80・1/40)	16
第16図	方形周溝墓出土土器(1/3)	18
第17図	倉地川古墳測量図(1/100)	21~22
第18図	埋葬施設平面図(1/30)	23
第19図	石室石障転用凹石(1/4)	23
第20図	副葬品 (装身具類2/3)	24
第21図	副葬品 (鉄製品1/2)	24
第22図	南側くびれ部検出状況(1/50)	25~26
第23図	南側くびれ部出土土器接合関係 土師器(1/50)	27~28
第24図	南側くびれ部出土土器接合関係 須恵器(1/50)	29~30
第25図	南側くびれ部出土土器接合関係 須恵器甕(1/50)	31~32
第26図	北側くびれ部検出状況(1/50)	33
第27図	周隍セクション図・土器片分布図 (1/30)	35
第28図	前方後円墳出土土師器(坏・皿・1/3)	36
第29図	前方後円墳出土土師器(高坏・壺・1/3)	37
第30図	前方後円墳出土須恵器(坏・1/3)	40
第31図	前方後円墳出土須恵器(高坏・1/3)	40
第32図	前方後円墳出土須恵器(甕・1/3)	42
第33図	前方後円墳出土須恵器(提瓶・壺・1/3)	42
第34図	前方後円墳出土須恵器 (小壺・平瓶・1/3)	43
第35図	前方後円墳出土須恵器(甕①・1/3)	44
第36図	前方後円墳出土須恵器(甕②・1/4)	45
第37図	前方後円墳出土須恵器(甕④・1/3)	46
第38図	前方後円墳出土須恵器(甕③・1/4)	47~48
第39図	前方後円墳出土須恵器(甕⑤・1/3)	49
第40図	前方後円墳出土須恵器(甕⑥・1/3)	50
第41図	前方後円墳出土須恵器(甕⑦・1/3)	50
第42図	前方後円墳出土須恵器(甕⑧・1/3)	51
第43図	倉地川地区土坑墓出土土器(1/3)	52
第44図	倉地川地区土坑墓 SK01(1/20)	52
第45図	倉地川地区集石遺構 SK02平面 セクション図(1/20)	53
第46図	倉地川地区 SB01平面 エレベーション図(1/50)	54
第47図	倉地川地区 SB01柱 E 4 出土土器(1/3)	54
第48図	倉地川地区 SB02平面 エレベーション図(1/50)	55
第49図	倉地川地区 SB03平面 エレベーション図(1/50)	56
第50図	倉地川地区 SB03柱 N 出土土器(1/3)	56
第51図	埋葬施設(玄室)規模	57
第52図	国見町内出土同心円文当て具痕 (石原・矢房遺跡1/1)	58
第53図	国見町内出土同心円文当て具痕 (十園遺跡1/1)	59

第54図	国見町内出土同心円文当て具痕 (倉地川地区①1/1)	60
第55図	国見町内出土同心円文当て具痕 (倉地川地区②1/1)	61
第56図	31区 SB01出土土師器(1/3)	62
第57図	龍王遺跡発見の囲郭施設と関連する建 物群(1/400)	64
第58図	囲郭施設内部 SB 4 出出土師器(1/3)	65
第59図	龍王遺跡22区 SB 5 住居跡出土土器 (1/3)	67

表 目 次

第1表	龍王遺跡周辺遺跡名.....	3
第2表	表面採集資料①②観察表.....	9
第3表	表面採集資料③観察表.....	10
第4表	表面採集資料④観察表.....	11
第5表	検出遺構一覧表.....	14
第6表	方形周溝墓出土土器観察表.....	17
第7表	周墳地区別土器分布表.....	34
第8表	前方後円墳出土土師器(坏・皿)観察表	36
第9表	前方後円墳出土土師器(高坏・壺)観察 表.....	38
第10表	前方後円墳出土須恵器(坏)観察表.....	39
第11表	前方後円墳出土須恵器(高坏)観察表	40
第12表	前方後円墳出土須恵器(壺・提瓶・壺) 観察表.....	41
第13表	前方後円墳出土須恵器(小壺・平瓶) 観察表.....	43
第14表	前方後円墳出土須恵器(甕)観察表.....	46
第15表	国見町内出土同心円文当て具痕.....	58
第16表	31区 SB01出土土器観察表	63
第17表	龍王遺跡22区 SB 5 出出土器観察表	68

図版目次

卷頭図版① 龍王遺跡倉地川地区上空より雲仙普賢岳を望む（2004年10月）

卷頭図版② 前方後円墳上空写真（龍王遺跡倉地川地区）
横穴式石室検出状況（写真右は東、上は開口部側）

卷頭図版③ 埋葬施設床面の鉄製品出土状況（写真下が西）
周墳での土器の集中（後円部南側）

卷頭図版④ 方形周溝墓検出状況（龍王遺跡倉地川地区）
方形囲郭施設の土器検出状況・断面・上空写真

図版 1 遺跡上空写真

周墳出土土師器壺(28図-4 P 36)

図版 2 倉地川地区検出状況（上が西）

周墳出土土師器高壺(29図-9 P 37)

前方後円墳上空写真（上が西）

周墳出土土師器高壺(29図-10 P 37)

南側周墳遺物検出状況（上が西）

周墳出土土師器高壺(29図-11 P 37)

方形周溝墓上空写真（上が西）

図版 6 周墳出土土師器高壺(29図-12 P 37)

方形周溝墓検出状況（南より）

周墳出土土師器高壺(29図-18 P 37)

方形周溝墓周溝断面（西より）

周墳出土土師器脚付壺(29図-22 P 37)

図版 3 方形周溝墓及び掘立柱建物出土土器

周墳出土土師器高壺

埋葬施設出土の石障片接合品

(29図-13・14 P 37)

（凹石・19図 P 23）

周墳出土土師器高壺

南側周墳出土状況（南より）

(29図-16・17・19 P 37)

南側周墳出土状況（東より）

周墳出土土師器壺(29図-20・21 P 37)

南側周墳断面（西より）

周墳出土土師器高壺

埋葬施設検出状況（上が東）

内部

周墳と埋葬施設の位置関係（南より）

周墳出土須恵器壺(30図-1 P 40)

南側くびれ部土器出土状況（西より）

周墳出土須恵器(30図-2 P 40)

図版 4 北側くびれ部土器出土状況（東より）

周墳出土須恵器壺類(30図 P 40)

前方後円墳検出作業（南より）

図版 7 周墳出土須恵器壺類(30図・31図 P 40)

古墳見学会の様子①

周墳出土須恵器高壺(31図-1 P 40)

古墳見学会の様子②

周墳出土須恵器高壺(31図-2 P 40)

土坑墓検出状況（北より）

周墳出土須恵器高壺脚部片・罐

土坑墓半裁状況（北より）

(31図-4・7, 32図-4 P 40・42)

土坑墓断面（西より）

周墳出土須恵器罐(32図-1 P 42)

土坑墓出土土器(43図 P 52)

周墳出土須恵器罐(32図-2 P 42)

図版 5 表面採集資料（弥生土器片・土師器片）

周墳出土須恵器罐(32図-3 P 42)

表面採集資料（須恵器片・9図 P 10）

周墳出土須恵器罐(32図-5 P 42)

表面採集資料（須恵器甕片・10図 P 11）

周墳出土須恵器罐(32図-6 P 42)

表面採集資料（陶磁器片・11図 P 12）

周墳出土須恵器長頸壺(33図-2 P 42)

周墳出土土師器壺類

図版 8 周墳出土須恵器小壺(34図-1 P 43)

周隍出土須恵器提瓶(33図-1 P 42)
周隍出土須恵器平瓶(34図-2 P 43)
周隍出土須恵器平瓶(34図-3 P 43)
周隍出土須恵器俵型甌
(32図-7 P 42)
周隍出土須恵器俵型甌の内部①
(32図-7 P 42)
周隍出土須恵器俵型甌の内部②
(32図-7 P 42)
周隍出土須恵器俵型甌の上面観
(32図-7 P 42)

図版9 周隍出土須恵器甌(35図① P 44)
周隍出土須恵器甌
(39図⑤ P 49, 35図① P 44)
周隍出土須恵器甌(36図② P 45)表面
周隍出土須恵器甌(36図② P 45)内面
周隍出土須恵器甌
(38図③ P 47~48)上半
周隍出土須恵器甌
(38図③ P 47~48)下半

図版10 周隍出土須恵器甌(37図④ P 46)外面
周隍出土須恵器甌(37図④ P 46)内面
周隍出土須恵器甌(39図⑤ P 49)表面
周隍出土須恵器甌(39図⑤ P 49)側面
周隍出土須恵器甌(40図⑥ P 50)外面
周隍出土須恵器甌(40図⑥ P 50)内面
周隍出土須恵器甌(42図⑧ P 51)
周隍出土須恵器甌(42図⑧ P 51)外面
底部
周隍出土須恵器甌(42図⑧ P 51)内面
底部

図版11 周隍出土須恵器甌(41図⑦ P 50)表面
周隍出土須恵器甌(41図⑦ P 50)表面
周隍出土須恵器甌(41図⑦ P 50)内面
31区住居跡出土土師器壺
(56図-1 P 62)
31区住居跡出土土師器(56図 P 62)



第1図 遺跡位置図(1/10,000)

第1章 龍王遺跡周辺の地理的・歴史的環境

第1節 龍王遺跡の地理的環境

雲仙市国見町は、長崎県南東部有明海と橋湾に胃袋状につきだした島原半島の半島北部に位置し、雲仙普賢岳から有明海に向かって撥状に広がる。東は有明町、西は瑞穂町、南は山狭で島原市・小浜町・千々石町と接し、北部は有明海に面している。平成2年の普賢岳の噴火によりできた主峰平成新山（1,489m）を起点として北へ緩やかな丘陵となり、南北12km余、東西約6km、面積37.6km²ほどの規模をもち、人口11,747人を数える。主な基幹産業は農業で、イチゴのビニールハウス栽培が盛んである。その他の農産物では「八斗木（ハットギ）白ねぎ」が有名で都心の高級料亭でも需要が多い。海産物では有明海で取れる渡りガニの「がざみ」が外洋から渡ってくる際、国見町多比良近海で収穫される時期が最もうまみが増すとされ「多比良ガニ」とよばれて珍重されている。

これまでの行政区画では、島原半島は雲仙岳を中心として放射状に1市16町に分かれていたが、平成17年10月11日に国見町、瑞穂町、吾妻町、愛野町、千々石町、小浜町、南串山町と合併して雲仙市となった。

龍王遺跡は国見町川原田～今出の地域に所在し、土黒川と倉地川に挟まれたなだらかな丘陵上の水田地帯に位置する。標高は30～15mを測る。遺跡西側を北上する倉地川の川床面との比高差は2～5mである。
(織田)

第2節 龍王遺跡周辺の歴史的環境

雲仙市国見町内には、旧石器時代～中・近世にかけての遺跡が71箇所知られているが、時代別の代表的な遺跡をとりあげながら歴史的な概観をしてみよう。

旧石器時代の遺跡では、百花台遺跡や松尾遺跡・石原遺跡・卯才町（うさいまち）遺跡などがある。百花台遺跡は平成15年にも重要遺跡情報保存活用事業に伴う地域拠点遺跡の確認調査が行われ、これまで多くの研究成果があり説明はそちらに譲る。石原遺跡は以前報告（川道・辻田2000）した経緯があり、後期旧石器時代の局部磨製石斧や台形石器などが検出されている。卯才町（うさいまち）遺跡は平成13年度に新規発見された遺跡で、筏遺跡に近接する標高8mの低台地上に位置する。土層の堆積が良好で、火山灰分析は行っていないがアカホヤ・AT相当層が確認されている。遺物は原ノ辻型台形石器が検出されている。

縄文時代の遺跡では、百花台遺跡や筏遺跡・石原遺跡・小ヶ倉（こがくら）A遺跡などがある。百花台遺跡では、早期・前期・中期・晩期を主体とする遺物包含層や遺構が確認されている。筏遺跡も百花台遺跡と同じくこれまで多くの学術調査が行われ、平成8年度の宅地造成に伴う調査では、県内では初見と思われる御領式段階の円形の住居跡が検出されている。石原遺跡では、早期・前期・晩期の土器や石器が多く出土している。小ヶ倉（こがくら）A遺跡は百花台遺跡から1kmほど北に位置し、標高は百花台より70mほど下がる。平成13年度の試掘調査により、アカホヤ火山灰再堆積層直下から右京西式単純の遺跡が確認されている。3m×3mの試掘坑から300点以上の土器片や黒曜石原石集石も検出されており包含層・遺構ともに良好な状態で埋蔵されている。平成14年度の開発事業に伴う遺跡調査では縄文晩期の溝や手向山式土器・轟式土器なども検出されている。

弥生時代の遺跡では、佃遺跡や十園（じゅうぞの）遺跡・小中野（こなかの）A遺跡・小中野B遺跡がある。佃遺跡は平成5年度に新規発見された遺跡で平成6年度～平成10年度にかけて調査が行われた。縄文晩期から中世にかけての複合遺跡であるが弥生時代中期後半及び古代に遺跡の画期がある。

弥生時代中期後半の遺跡からは2重の環濠や住居跡、大型の掘立柱建物跡、甕棺などが検出されており、環濠集落と思われる。住居跡は10軒程しか検出されていないものの、おおむね直径が10m前後と大型で、最大のものは楕円形を呈し、長軸14m、短軸13mを測る。十園遺跡も中期後半の遺跡で2重の環濠、住居跡、甕棺などが検出されている。住居跡は隅丸方形を呈し、また、多量の肥後系土器(黒髮式土器)が出土しており佃遺跡とは違った様相が伺える。小中野A遺跡・小中野B遺跡も同時期の遺跡で中期後半～後期前半の土器が多量に出土している。また、石鎌などの収穫用の石器も出土している。

古墳時代及び古代の遺跡では、今回報告する龍王遺跡や佃遺跡・矢房(やふさ)遺跡・上篠原遺跡・五万長者遺跡・石原遺跡・小中野A遺跡・小中野B遺跡・十園遺跡などがある。佃遺跡や矢房遺跡からは古墳時代の住居跡から良好な土師器が検出されている。上篠原遺跡は平成16年に地域拠点遺跡の確認調査が行われ、以前発見された陶質土器は検出されなかつたが、土師器の高杯、壺、甕などが検出された。壺、甕は破片が多く器形のわかるものはわずかであったが、高杯は点数も多く器形がわかるものも多く検出された。五万長者遺跡は老司系布目瓦が検出されることで古来から知られている。肥前国高来郡郡家の推定地とされてきたが、近年の長崎県教育委員会の調査によれば「高来郡郡家に付随する郡寺跡」とされている。石原遺跡・小中野A遺跡・小中野B遺跡からは7世紀末～8世紀にかけての遺物・遺構が多く見つかっている。「宮」「ム」「万」と書かれた墨書き土器や「益」「上」「宮」と刻まれた刻書き土器などが出土しており、近接する五万長者遺跡とならんで当時の中心的な集落の跡と考えている。十園遺跡からは「風土記」の記載にみられる肥前国高来郡「郡衙」(ぐんが)に関すると思われる大型の掘立柱建物跡が検出されている。また古代律令制において、貴族や官僚・役人などが公式行事の際に着用する帯につける装飾品の1つである石帶(せきたい)がその建物群に関連すると思われる溝から多量の土器とともに出土している。

中世では、佃遺跡の青磁碗、石原遺跡の土坑墓などがある。また、丘陵先端などを利用した山城である神代城(鶴亀城)、多比良城などは中世段階の城趾と考えられる。また、龍王遺跡ののる丘陵の南にある台地上に「馬渡」「堂ノ前」「久保屋敷」「小屋敷」「横馬場」などの小字名が残されている。

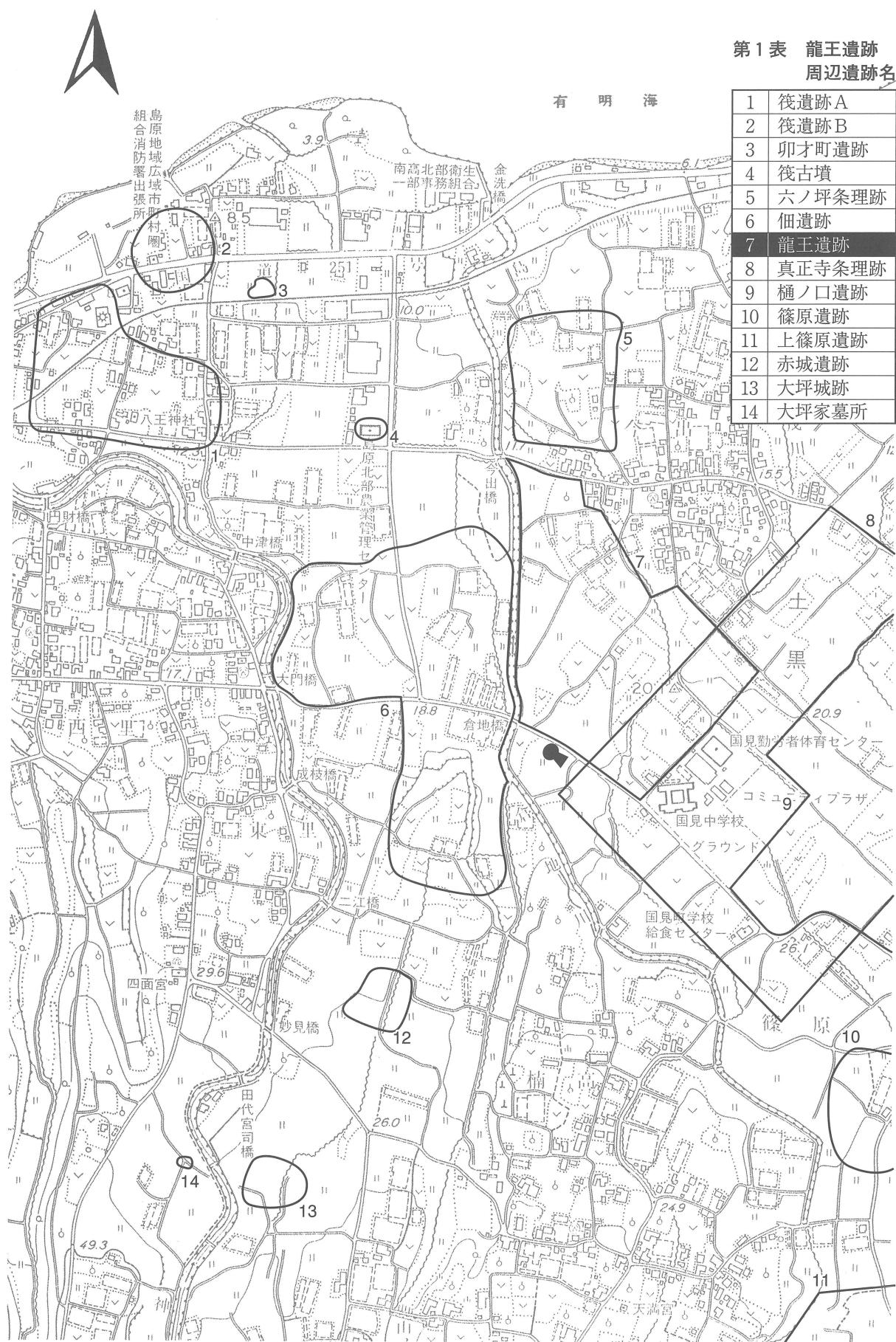
(織田)

【主要参考文献】

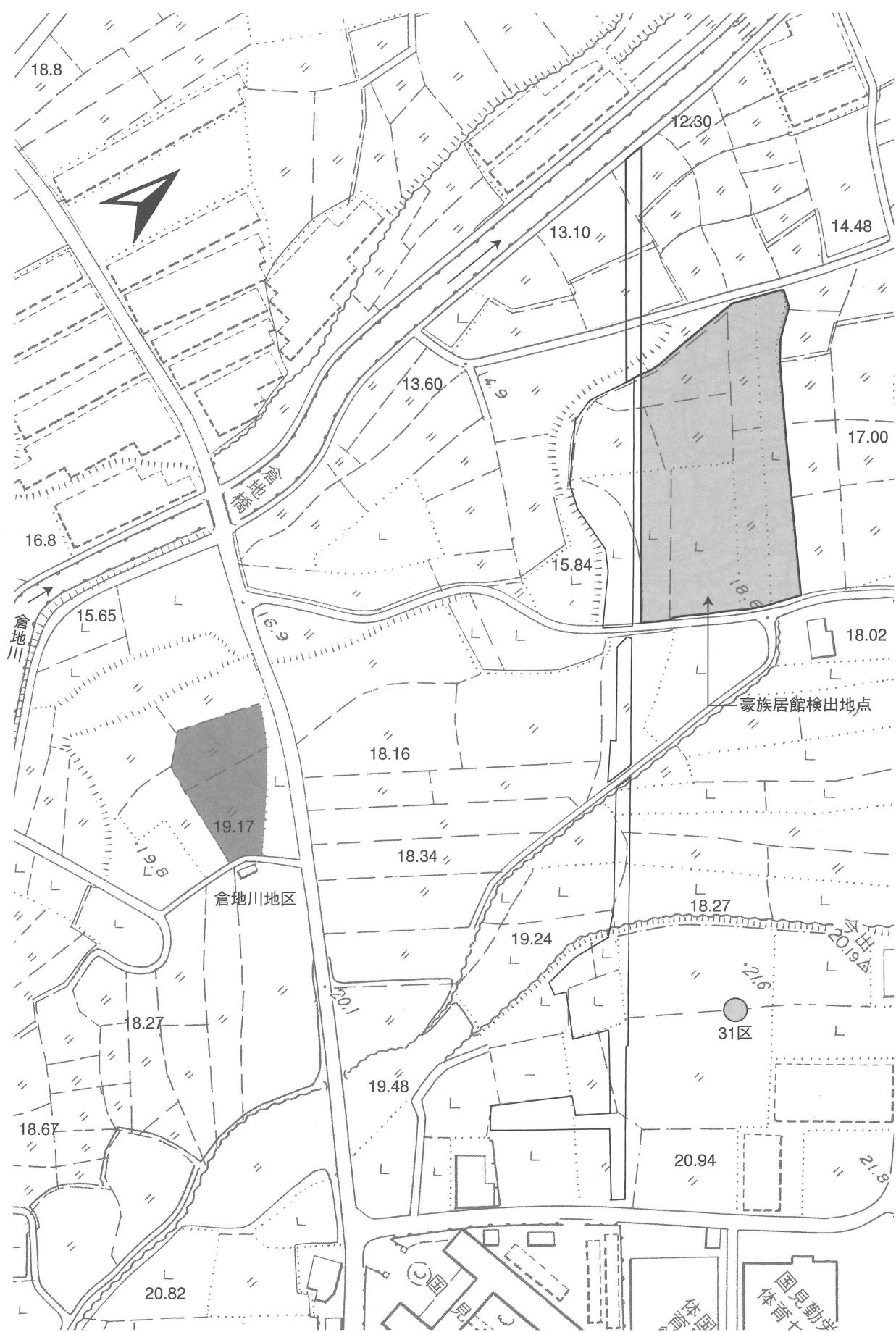
- 寺田正剛編 1994『筏遺跡』県内重要遺跡範囲確認調査報告書Ⅱ 長崎県教育委員会
辻田直人・竹中哲朗編 2003『石原遺跡・矢房遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第3集
長崎県国見町教育委員会
川道寛・柚木亜貴子編 2005『第1部上篠原遺跡』『地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅱ』
長崎県文化財調査報告書 第185集 長崎県教育委員会
辻田直人・竹中哲朗編 2004『十園遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第4集
長崎県国見町教育委員会
辻田直人・竹中哲朗編 2005『十園遺跡Ⅱ』国見町文化財調査報告書(概報)第5集
長崎県国見町教育委員会
辻田直人 2002『松尾遺跡』国見町文化財調査報告書(概報)第2集 長崎県国見町教育委員会
森浩一・松藤和人編 1994『百花台東遺跡』同志社大学文学部考古学調査報告 第8冊
同志社大学文学部文化学科
川道寛編 2004『第I部百花台遺跡群』『地域拠点遺跡内容確認発掘調査報告書Ⅰ』
長崎県文化財調査報告書 第176集 長崎県教育委員会
川道寛・辻田直人 2000『長崎県国見町の中期旧石器時代と後期旧石器時代初頭の石器群－松尾遺跡・石原遺跡を取りあげて－』『旧石器考古学』59 旧石器文化談話会
辻田直人・竹中哲朗 2003『長崎県国見町における縄文時代草創期遺跡の調査－小ヶ倉A遺跡の遺跡範囲確認調査から－』『西海考古』5 西海考古同人会

第1表 龍王遺跡
周辺遺跡名

1	筏遺跡A
2	筏遺跡B
3	卯才町遺跡
4	筏古墳
5	六ノ坪条理跡
6	佃遺跡
7	龍王遺跡
8	真正寺条理跡
9	桶ノ口遺跡
10	篠原遺跡
11	上篠原遺跡
12	赤城遺跡
13	大坪城跡
14	大坪家墓所



第2図 龍王遺跡周辺遺跡図(1/2,000)



第3図 調査区配置図(1/2,000)

第2章 調査にいたる経緯

第1節 前方後円墳発見の経緯

2004年8月より龍王遺跡の水路部分の発掘調査が開始された。台風・雨などの自然現象により現場の状態は良好とはいえないものであった。8月30日、龍王遺跡の隣接地にあたる倉地川地区の圃場整備工事中の掘削断面に縄文時代および旧石器時代遺物包含層が発見される。この発見は工事関係者の協力によるものが大きく、それがなかったならば前方後円墳および旧石器時代包含層は記録保存がなされないまま破壊されていたであろう。翌日から工事業者の了解により、現地確認のための小規模な調査を行う。縄文土器片及び溝状遺構を検出する。9月1日までの確認作業により、県内初となる方形周溝墓が発見される。現地では暗褐色土層上面に方形の黒い帯とその中に埋葬施設と思われる礫敷きが確認された。方形周溝墓は長崎県内では初の発見となるため、その重要性をかんがみ工事計画段階では調査対象地区としていなかった当地区の調査必要範囲を確認するための簡単な検出作業を行った。その結果、事業主体側の協力により倉地川地区の発掘調査は期限付きではあるが可能となった。調査範囲には旧地割が残っていたので、その一枚全面を調査区とした。検出作業の結果、旧地割内には須恵器を包含する幅2mほどの溝があること、そして平安時代の土坑墓、縄文時代早期の包含層などが混在する状況が明らかとなっていました。この段階でどの程度の調査期間が必要であるかを概算し、その期限に向けて調査を行った。須恵器を包含する溝の検出作業が進むにつれ、この溝が方形周溝墓の中心で検出された礫敷きなどの横穴式石室を中心とした円墳の周隣であろうということが明らかになった。

9月16日、方形周溝墓の調査が一段落し、円墳を構成する溝の本格的な検出作業に入り、溝の形状を平板測量するなどの作業を行った。その結果、古墳は円墳ではなく前方後円墳である可能性が高くなった。上空写真の撮影を行い、その写真を確認したうえで前方後円墳と判断し、長崎県学芸文化課へその重要性を報告した。その後現場での調査と現地保存へ向けての協議とを平行しながら行った。残念ながら、古墳の現地保存は難しく、記録保存により後世に伝えることとなった。

また、長崎県文化財保護指導員である小田富士雄（福岡大学名誉教授）氏に現地視察（写真次頁）をお願いし、その重要性を再認識し、記録保存に耐えうる調査に尽力した。この段階で調査の八割方は完了していた。その後、新聞・報道各社への記者発表を10月19日に行い、現地説明会を10月24日に行った。

（竹中）

第2節 記者発表・現地説明会

記者発表は調査終了直前の平成16年10月19日（火曜日）午前10時より国見町役場（現国見総合支所）別館2階の会議室で行った。記者発表は国見町教育委員会教育長原宮之、社会教育係辻田直人、文化財調査員竹中哲朗で対応し、長崎県教育委員会学芸文化課より本田秀樹文化財保護主事にも同席いただいた。会場で1時間程度の事実確認・出土品の撮影などを行った後、雨天ではあったが現地で確認・質疑を行った。

現地説明会当日は、晴天に恵まれ、多数の参加者が集まった。会場では、教育長原宮之・教育次長吉田正昭及び社会教育係辻田・文化財調査員竹中および現場作業員で会場設営と参加者への対応を行った。午前10時、教育長の挨拶を皮切りに説明会を開始し、夕刻まで次々と来訪する参加者への説明を行った。説明会用資料はA4両面刷り1枚を用意し参加者すべてに配布した。また現地のテント下に出土品を展示し、前方後円墳全体の上空写真を展示し、全体的な説明を行った。30mを超える前方後円墳であるため、全体的な説明のみでなく、周隣、埋葬施設、出土品などの各要点に分け、現地に導線をつくり各ポイントで説明を行った（写真次頁）。結果、受付で記名していただいた方々のみで120名の方々に参加していただき、日没前に会場を閉鎖した。

（竹中）

出土品の説明



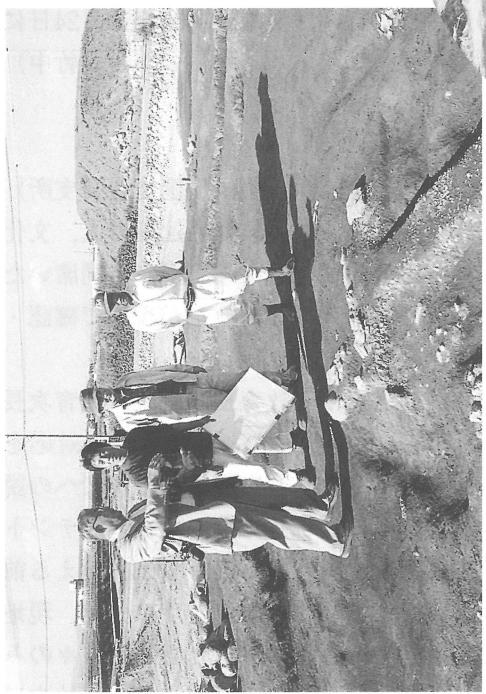
教育長 挨拶



現地説明会
2004.10.24



埋葬施設の説明



小田富士雄氏現地视察
(左端) (2004.10.11)

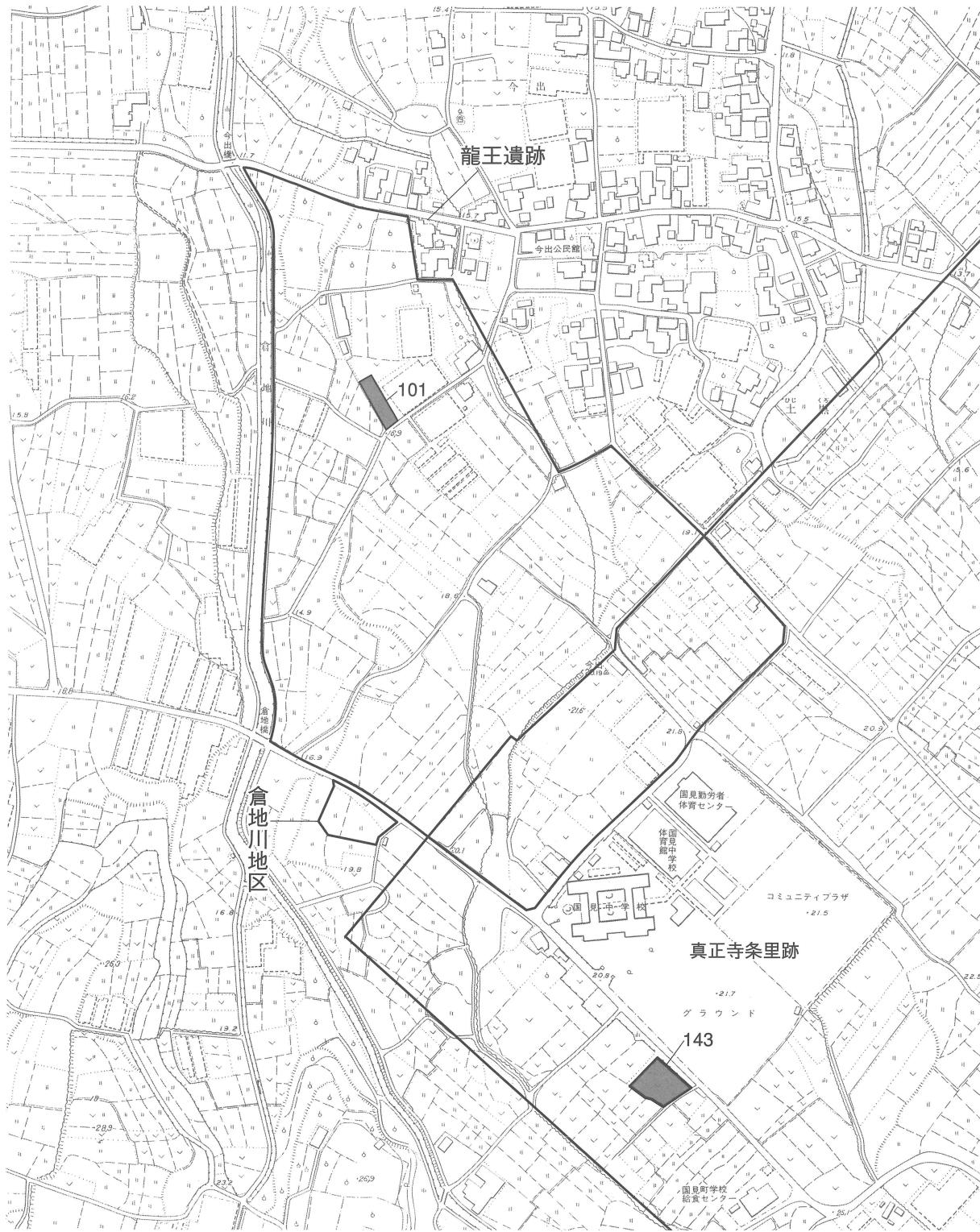


周囲の説明

第3章 調査の概要

第1節 試掘調査の成果（第4～6図）

龍王遺跡の現在の範囲は第4図にあるように国見町立国見中学校（現雲仙市立）から倉地川にかけての水田一帯である。東側は真正寺条里跡と重複するが、およそ15,000m²の範囲である。平成16年3月から4月までの期間に行った試掘調査は、遺構検出面および遺物包含層の検出レベルを追及するこ



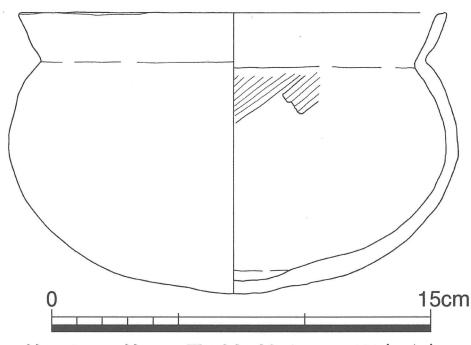
第4図 龍王遺跡全体図(1/4,000)



第5図
真正寺条里跡
第143号試掘坑
出土石器(1/1)

とを目的としている。そのため、検出遺物は少なかったが、ほとんどの試掘坑で遺物包含層および遺構検出面が確認できた。第5図は真正寺条里跡に設けた第143試掘坑の攪乱層から出土した石製管玉である。長さ1.8cm、直径4.5mm、斑点のみられる浅い緑色を呈する硬質の石材である。穿孔は両方向から行っている。第6図は龍王遺跡内に設けた第101試掘坑で確認された土器である。丘陵縁辺部にあたる倉地川に臨む畠地上である。遺構はピットなどが検出されており、出土状況などの詳細は結果報告に譲る。土器はほぼ半分ほどまで接合した複合口縁鉢である。高さ11.3cm、口縁部直径17.2cm（復元）、胴部最大径18.0cm（復元）、最大径は底部から高さ5.6cmにある。頸部直径は15.4cm、高さは9.3cm、底部は丸底で胴部最大径は中位よりやや上にあり、口縁部は短く直立気味に外反し、端部上面は強い横ナデ調整による浅い溝をつくっている。外面は全面ナデ調整、内面は斜め刷毛調整の後に最大径部分に指頭による圧痕がめぐり、その下はナデ調整である。また、底部には丸い粘土板を貼り付けたような痕跡もみられる。胎土には角閃石が多く、石英（1～2mm大）および白色粒子（風化礫1～5mm大）・雲母粒子も確認できる。色調は明茶褐色(Hue5YR5/6・5/8)。

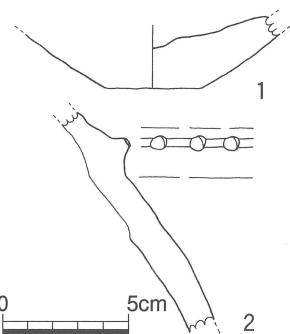
(竹中)



第6図 第101号試掘坑出土土器(1/3)

第2節 表面採集資料の紹介（第7～11図 第2～4表 図版5）

(1) 弥生土器（第7図 第2表 図版5）



第7図 表面採集資料①(1/3)

1は壺の底部片である。底径3.8cmで内外面に刷毛調整がみられるが、かなり剥がれてしまっている。2は壺頸部片である。外面には突帯がとりつけられている。内外面ともに刷毛調整がみられるが内面は半分ほど剥がれてしまっている。

(織田)

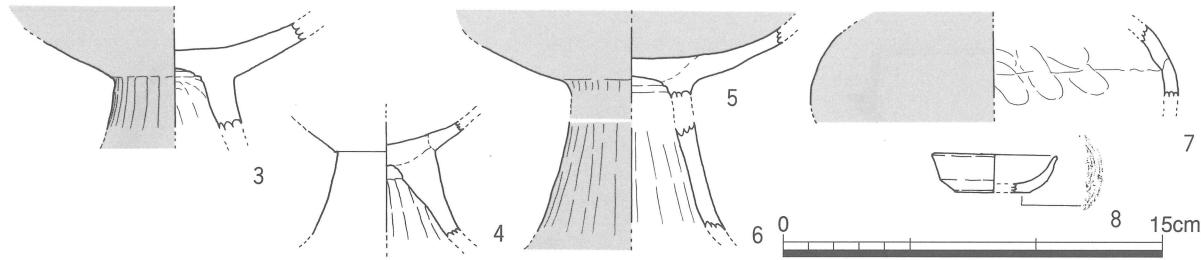
(2) 土師器（第8図 第2表 図版5）

3は土師器高杯片で壺底部は1.0cmほどあり重厚なつくりである。外面壺部はナデ、脚部は面取り、内面壺部はナデ、脚部は削りが施される。壺部内外面、脚部外面に赤色顔料がかかる。4は土師器高杯片で、外面壺部はナデ、脚部は面取り、内面脚部は削りが施される。色調は浅黄橙色。5は土師器高杯片で口縁部に立ち上がる部分での復元直径は11.8cmである。内外面ともにナデ調整が施され、赤色顔料がかかる。6は土師器高杯脚部片で、外面は面取りミガキ、内面はヘラ削りが施される。胎土はキメ細かく、赤色粒子、白色粒子を含む。外面には赤色顔料がかかる。7は土師器小型壺片で外面ミガキ、内面指頭オサエが施される。外面には赤色顔料がかかる。胎土はキメ細かく赤色砂、黒色粒子を含む。8は土師器皿片で口縁部がわずかに外反する。口縁部直径（復元径）5.0cm、底径（復元径）3.0cm、高さ1.5cmと小型である。内外面ともにナデ調整が施されている。底部は糸切り。

(織田)

(3) 須恵器（第9・10図 第3・4表 図版5）

9は須恵器壺身片で、立ち上がりや受け部の端部が鋭く仕上げられており、稜や溝がはっきりしている。立ち上がりは直立し、受け部は水平に広がる。内外面ともに回転利用のナデ調整が施されてお

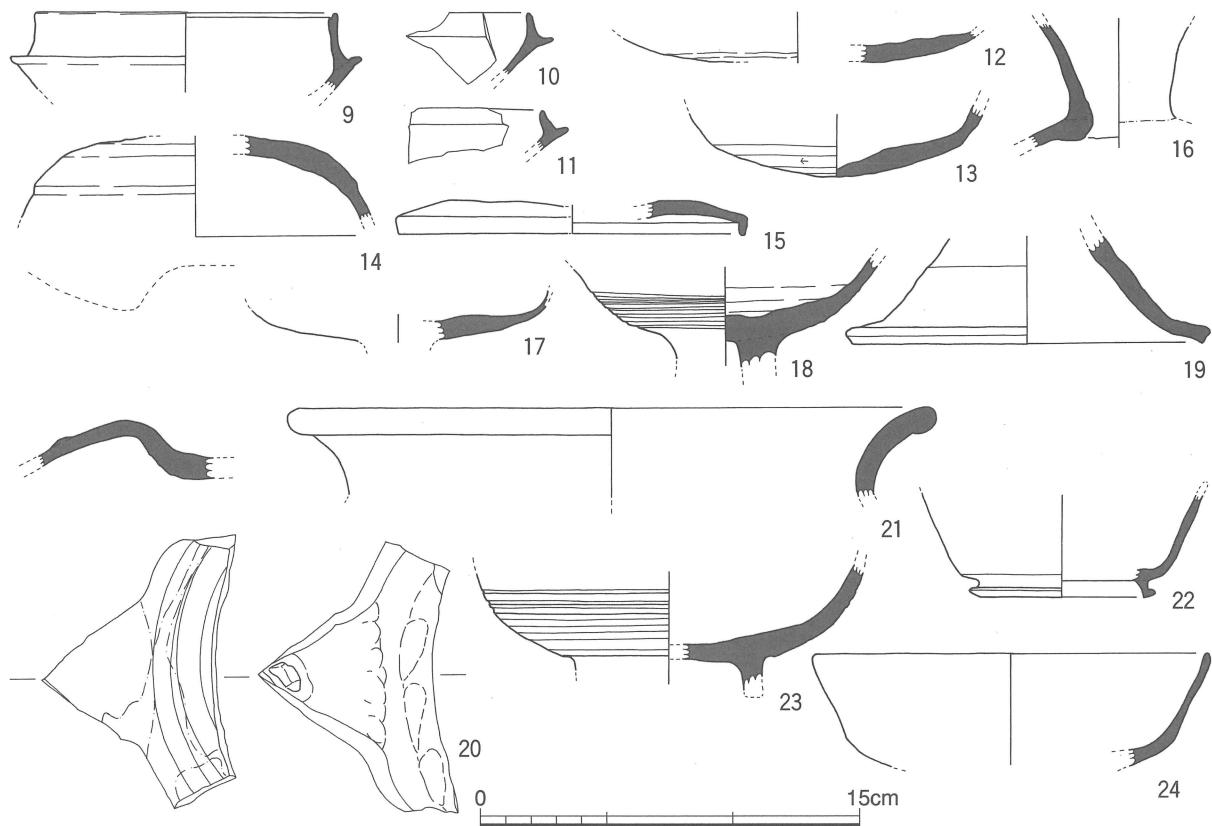


第8図 表面採集資料②(1/3)

第2表 表面採集資料①②観察表

図	番号	種別	法量(cm) (復元径)	技法的特徴	胎土/色調	備考
7	1	弥生土器 底部片	残存高 底径	外面 ナデ 内面 刷毛目	石英, 黒雲母, 長石, 赤・白色粒子, 角閃石 橙(Hue7.5YR6/6)	内面は刷毛を施してあるが, かなり剥がれている
	2	弥生土器 頸部片	残存高	外面 刷毛目 内面 刷毛目	石英, 黒雲母, 長石, 赤・白色粒子, 角閃石 橙(Hue7.5YR6/6)	内面は刷毛を施してあるが, かなり剥がれている
8	3	土師器 高杯片	残存高 脚部径 坏部径	外面 坏部ナデ, 脚部面取り 内面 坏部ナデ, 脚部削り	赤色粒子, 白色粒子 橙(Hue5YR7/6)	外面赤色顔料がかかる
	4	土師器 高杯片	残存高	外面 ナデ 内面 削り	角閃石少々 浅黄橙(Hue10YR8/4)	
8	5	土師器 高杯片	残存高 脚部径 坏部径	外面 ナデ 内面 ナデ	赤色粒子, 白色粒子 橙(Hue5YR7/8)	外面内面 ともに赤色顔料がかかる
	6	土師器 高杯脚部片	残存高	外面 面取りミガキ 内面 ヘラ削り	赤色粒子, 白色粒子 橙(Hue5YR7/8)	外面赤色顔料がかかる
8	7	土師器 小型壺片	残存高	外面 ミガキ 内面 指頭オサエ	赤色砂, 黒色粒子 外面 橙(Hue7.5YR7/6) 内面 浅黄橙(Hue7.5YR8/4)	外面赤色顔料がかかる
	8	土師器 皿片	口縁部直径 底径 器高	外面 ナデ, 底部糸切り 内面 ナデ	白色粒子, 赤色砂 橙(Hue7.5YR6/6)	

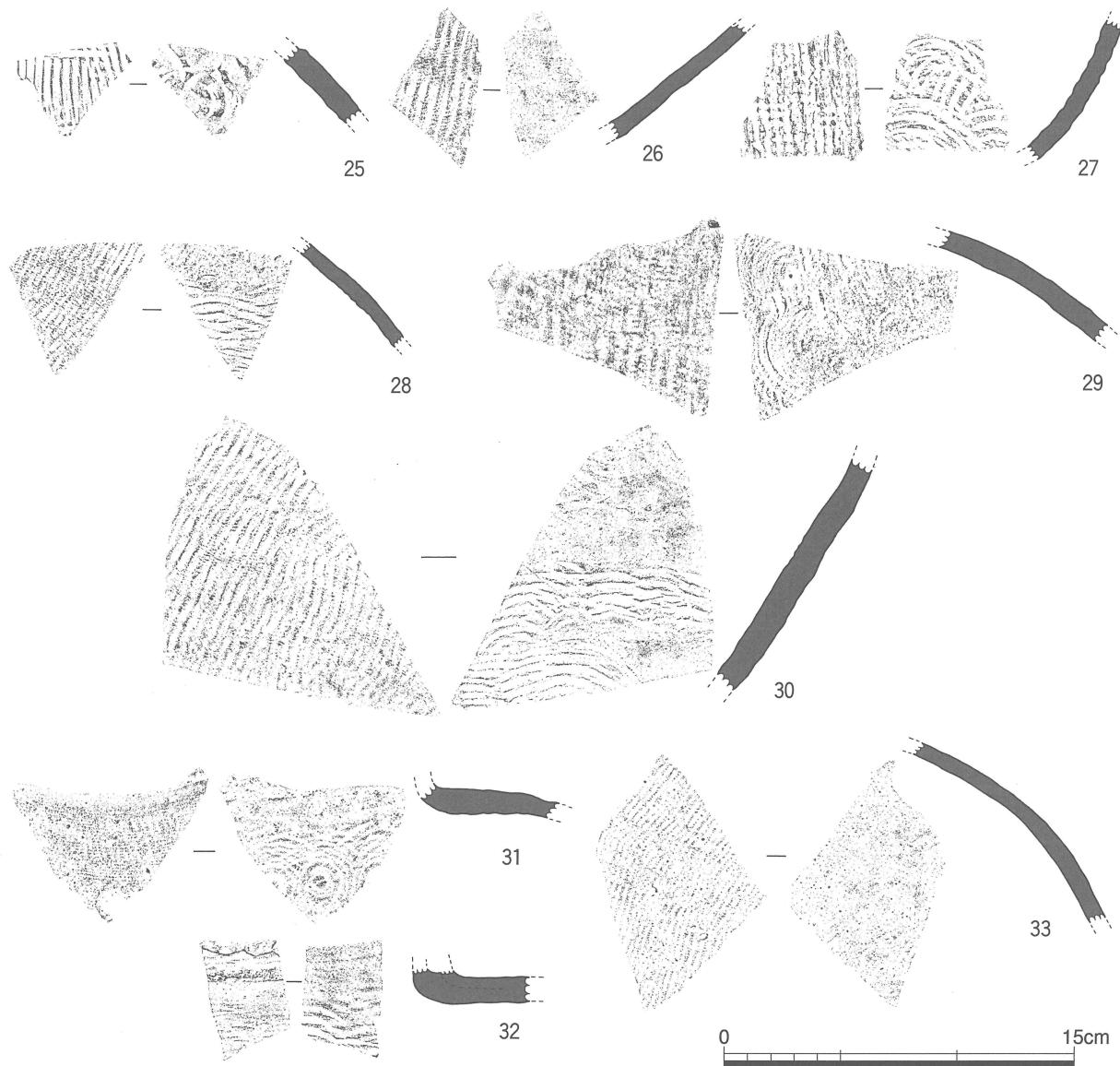
り、内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。胎土はキメ細かく、白色粒子、黒色粒子を含む。色調は内外面ともに灰色である。10は須恵器坏身片で、立ち上がりや受け部の端部は鋭く仕上げられている。立ち上がりはやや内弯し、受け部は水平に広がる。内外面ともに回転利用のナデ調整が施されている。胎土はキメ細かく、白色粒子を含む。色調は内外面ともに青灰色である。11は須恵器坏身片で、立ち上がりは内弯し、受け部は斜めに上がる。内外面ともに回転利用のナデ調整が施されている。胎土はキメ細かく、白色粒子を含む。色調は内外面ともに灰色である。12は須恵器坏身片で、胴部の立ち上がりはゆるい傾斜で、浅く広い形態に復元できる。外面は回転利用の削り、内面は回転利用のナデ調整が施してある。内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。胎土は粗めの生地で、白色粒子を含む。色調は内外面ともに灰白色である。13は須恵器坏身片で、外面は回転利用の削り、内面は回転利用のナデ調整が施してあり、内面はナデ調整による凹凸が観察できる。胎土はキメ細かく、白色粒子を含む。色調は外面灰黄褐色、内面にぶい黄褐色である。14は須恵器坏蓋片で、残存高3.4cm。外面は自然釉がかかり、回転利用の削り調整、内面は回転利用のナデ調整が施される。胎土は白色粒子、黒色粒子を多く含む。色調は外面オリーブ黒色、内面灰白色である。15は須恵器坏蓋片で、少しゆがみがある。内外面ともに横ナデ調整が施されている。胎土は白色粒子が多く、黒色粒子も含む。色調は内外面ともに灰白色である。16は須恵器平瓶口縁部で、残存高4.2cm、頸部直径（復元径）4.0cmである。口縁部は緩やかに外反する。内外面ともにナデ調整が施されている。胎土は砂っぽく、白色粒子が多く、黒色粒子も含む。色調は外面灰褐色、内面灰白色である。17は須恵器高杯坏部下半で、坏部は水平に広がりその後立ち上がる。外面にはナデ、内面には回転利用のナデ調整が施されている。内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。胎土はキメ細かく、白色粒子を含む。色調は内外面ともに灰色である。18は須恵器高杯脚坏接合部分で、残存高4.2cm、脚部直径4.0cm、口縁部直径12.0cm以



第9図 表面採集資料③(1/3)

第3表 表面採集資料③観察表

図	番号	種別	法量(cm)(復元径)	技法的特徴	胎土/色調	備考
9	9	須恵器 坏身片	口縁部直径(12.0) 残存高 3.1	外面回転利用のナデ 内面回転利用のナデ	黒色粒子,白色粒子 灰(HueN51)	
	10	須恵器 坏身片	残存高 2.5	外面回転利用のナデ 内面回転利用のナデ	白色粒子,キメ細かい 青灰(Hue5B5/)	
	11	須恵器 坏身片	残存高 1.7	外面回転利用のナデ 内面回転利用のナデ	白色粒子,キメ細かい 灰(HueN5/)	
	12	須恵器 坏身片	残存高 1.2	外面回転利用の削り 内面回転利用のナデ	白色粒子 灰白(HueN7/)	焼成良好
	13	須恵器 坏身片	残存高 2.9	外面回転利用の削り 内面回転利用のナデ	外面灰黄褐(Hue10YR6/2) 内面にぶい黄褐(Hue10YR6/3)	キメ細かい,白色粒子
	14	須恵器 坏蓋片	残存高 3.4	外面回転利用の削り 内面回転利用のナデ	外面オリーブ黒(Hue7.5Y3/2) 内面灰白(HueN8/)	白色粒子,黑色粒子多い
	15	須恵器 坏蓋片	復元径 14.0 残存高 1.3	外面横ナデ 内面横ナデ	白色粒子多い,黑色粒子 灰白(Hue2.5Y8/1)	
	16	須恵器 平瓶口縁部	残存高 4.8 頸部直径(4.0)	外面ナデ 内面ナデ	外面灰褐(Hue7.5YR5/2) 内面灰白(Hue7.5Y7/1)	白色粒子多い,砂っぽい, 黑色粒子
	17	須恵器 高杯坏部下半	残存高 1.8	外面ナデ 内面回転利用のナデ	白色粒子 灰(HueN6/)	キメ細かい 焼成良好
	18	須恵器 高杯脚坏 接合部分	残存高 4.2 脚部直径 4.0 口縁部直径 12以上	外面回転利用の削り 内面回転利用のナデ	白色粒子,黑色粒子 黄灰(Hue2.5Y6/1~5/1)	
	19	須恵器 高杯脚部	残存高 4.3 裾(14.0)	外面回転利用のナデ 内面回転利用のナデ	外面灰(HueN4/) 内面灰白(Hue5Y8/27/1)	内外面自然釉がかかる 黑色粒子,白色粒子
	20	須恵器 提瓶頸部片	残存高 7.0	外面ナデ,削り 内面指頭オサエ,ナデ	外面灰(Hue7.5Y6/1) 内面灰白(Hue2.5Y7/1)	白色粒子,黑色粒子多い
	21	須恵器 甕口縁部片	残存高 3.4 口縁部直径(24.8)	外面ナデ 内面回転利用のナデ	白色粒子多い,黑色粒子 灰(Hue7.5Y6/1)	外面内面ともに自然釉がか かり,外面の釉は厚い
	22	須恵器 高台付坏片	残存高 4.1	外面ナデ,ヘラ削り 内面回転利用のナデ	白色粒子,黑色粒子 灰(HueN5/)	外面に自然釉がかかる
	23	須恵器 高台付坏片	残存高 5.0 高台直径(7.4)	外面回転利用刷毛,ナデ 内面回転利用のナデ	白色粒子多い,砂っぽい 灰白(Hue7.5Y7/1)	
	24	須恵器 坏片	残存高 4.5 口縁部直径(15.4)	外面横ナデ 内面横ナデ	キメ細かい,白色粒子多い,石英 灰(Hue5Y6/1)	

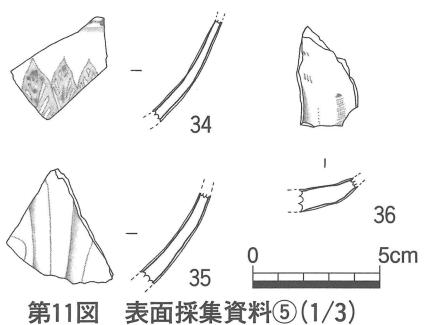


第10図 表面採集資料④(1/3)

第4表 表面採集資料④観察表

図	番号	種別	法量(cm) (復元径)	技法的特徴	胎土/色調	備考
10	25	須恵器 甕胴部片	残存高 3.3	外面 平行	白色粒子, 黒色粒子	焼成良好
	26	須恵器 甕胴部片		内面 同心円	外面 にぶい黄(Hue2.5Y6/3) 内面 オリーブ灰(Hue2.5GY6/1)	
	27	須恵器 甕胴部片	残存高 4.9	外面 平行, ナデ	白色粒子, 黒色粒子	焼成良好
	28	須恵器 甕胴部片		内面 ナデ	灰(HueN5/)	
	29	須恵器 甕胴部片	残存高 5.9	外面 平行	白色粒子, キメ細かい	自然釉がかかる 焼成良好
	30	須恵器 甕胴部片		内面 同心円	灰黄(Hue2.5Y6/2)	
	31	須恵器 甕肩部片	残存高 4.4	外面 平行, ナデ	白色粒子, 長石	焼成良好
	32	須恵器 甕頸部片		内面 平行, ナデ	灰(HueN6/)	
	33	須恵器 甕胴部片	残存高 10.0	外面 平行, 刷毛目	白色粒子多い	自然釉がかかる 焼成良好
				内面 同心円	外面 灰黄(Hue2.5Y6/2) 内面 暗灰黄(Hue2.5Y5/2)	
				外面 刷毛目	白色粒子, 黒色粒子	
				内面 ナデ, 同心円	灰(HueN4/)	焼成良好
				外面 刷毛目	白色粒子, 長石	自然釉がかかるが剥がれて いる 焼成良好
				内面 ナデ, 同心円	外面 にぶい黄(Hue2.5Y6/3) 内面 灰白(HueN7/)	
				外面 ナデ	白色粒子多い	焼成良好
				内面 ナデ, 同心円	暗青灰(Hue10BG4/1)	
				外面 平行, ナデ	白色粒子, 黒色粒子	焼成良好
				内面 同心円	外面 灰(Hue5Y4/1), 内面 灰白(HueN7/)	

上。胴部立ち上がりはゆるい傾斜である。外面は回転利用の削り、内面は回転利用のナデ調整が施してある。内面にはナデ調整による凹凸が観察できる。胎土はキメ細かく、白色粒子、黒色粒子を含む。色調は内外面ともに黄灰色である。**19**は須恵器高杯脚部で、内外面ともに自然釉がかかっており、内外面ともに回転利用のナデ調整が施されている。外面はナデ調整による凹凸が観察できる。胎土はキメ細かく白色粒子、黒色粒子を含む。色調は外面灰色、内面灰白色である。**20**は須恵器提瓶頸部片で、残存高7.0cm。外面には自然釉がかかり、回転利用のナデ、回転利用の削りが施され、内面には少量の自然釉が一部かかっており、指頭オサエ、ナデ調整が施されている。胎土はキメ細かく、白色粒子、黒色粒子を多く含む。色調は外面灰色、内面灰白色である。**21**は須恵器甕口縁部片で、口唇部は外反する。内外面ともに自然釉がかかり、外面の釉は厚い。外面はナデ、内面は回転利用のナデ調整が施されている。胎土は白色粒子を多く含み、黒色粒子も含む。色調は内外面ともに灰色である。**22**は須恵器高台付坏片で、胴部の立ち上がりは急で、高台は外側に張り出す形態である。外面はナデ、ヘラ削り、内面は回転利用のナデ調整が施されている。外面は自然釉がかかる。胎土はキメ細かく、白色粒子、黒色粒子を含む。色調は内外面ともに灰色である。**23**は須恵器高台付坏片で、坏部は比較的深い形態で、高台は外側に張り出す形態である。外面は回転利用の刷毛目とナデ、内面は回転利用のナデ調整が施されている。胎土は砂っぽく、白色粒子を多く含む。色調は内外面ともに灰色である。**24**は須恵器杯片で、胴部の立ち上がりは比較的急で口縁部はわずかに内弯する。内外面ともに横ナデ調整が施されている。胎土はキメ細かく、白色粒子、石英を多く含む。色調は内外面ともに灰色である。**25**は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩き、内面に同心円文当て具痕がみられる。胎土に白色粒子、黒色粒子を含み、色調は外面がにぶい黄色、内面がオリーブ灰色である。**26**は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩きとナデ、内面にナデがみられる。胎土は白色粒子、黒色粒子を含み、色調は内外面ともに灰色である。**27**は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩き、内面に同心円文当て具痕がみられる。胎土はキメ細かく、白色粒子を含む。色調は内外面ともに灰黄色。焼成不良で未還元である。**28**は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩きとナデ、内面に平行文当て具痕とナデがみられる。胎土は白色粒子や長石を含む。色調は内外面ともに灰色である。**29**は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩き、内面に同心円文当て具痕がみられる。胎土は白色粒子が多くみられる。色調は外面灰黄色、内面暗灰黄色である。**30**は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩きと刷毛目、内面に同心円文当て具痕とナデがみられる。胎土は白色粒子、黒色粒子を含む。色調は内外面ともに灰色である。**31**は須恵器甕肩部片で、外面には自然釉がかかり、回転利用の刷毛調整がみられる。内面は同心円文当て具痕とナデがみられる。胎土は白色粒子や長石を含む。色調は外面にぶい黄色、内面灰白色である。**32**は須恵器甕頸部片で、外面は回転利用の横ナデ調整、内面は同心円文当て具痕とナデがみられる。胎土は白色粒子を多く含む。色調は内外面ともに暗青灰色。**33**は須恵器甕胴部片で、外面に平行叩きとナデ、内面に同心円文当て具痕がみられる。外面には自然釉がかかっている。胎土は白色粒子、黒色粒子を含む。色調は外面灰色、内面灰白色である。 (織田)



第11図 表面採集資料⑤(1/3)

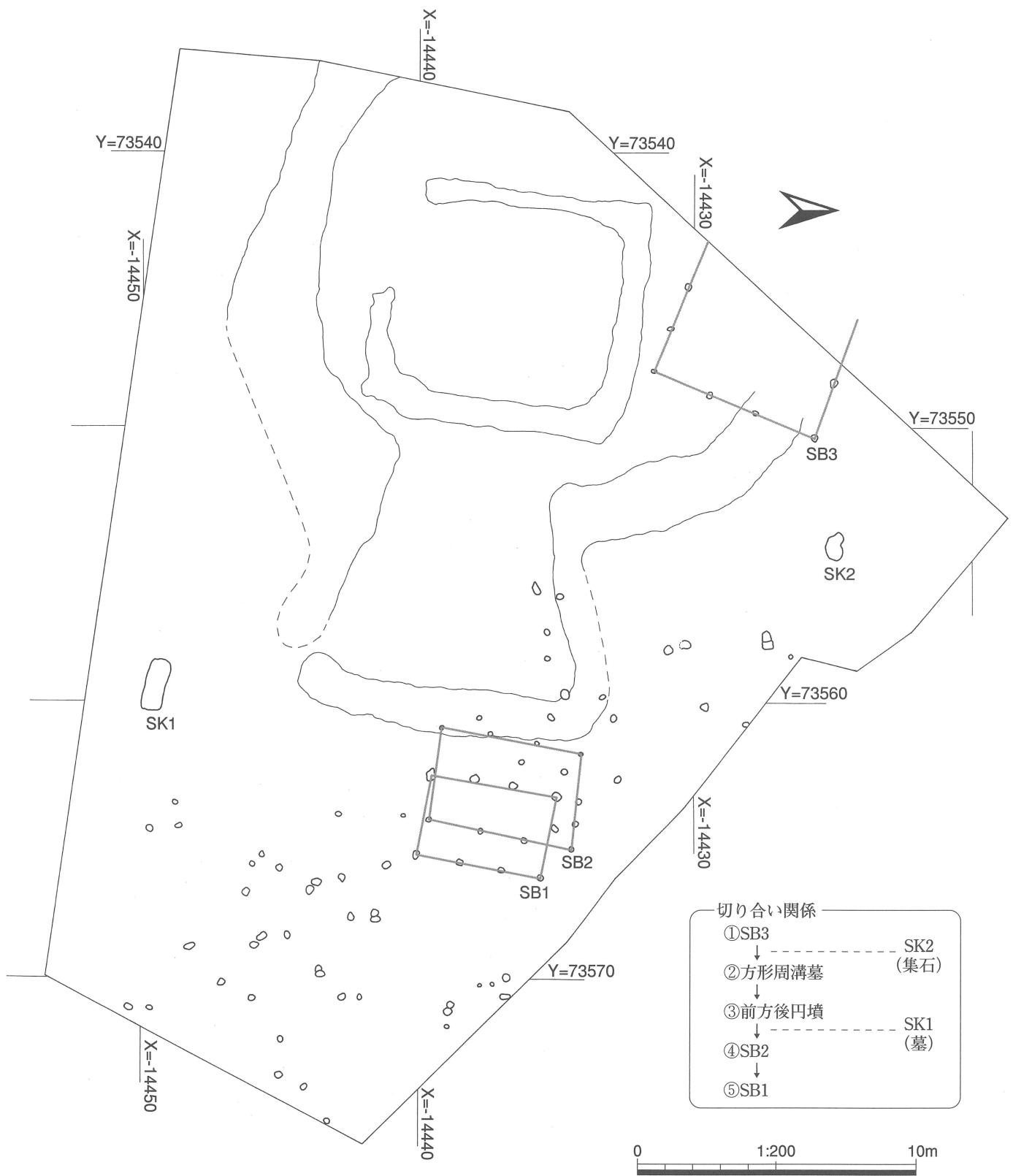
(4) 陶磁器 (第11図 図版5)

34は染付け碗胴部片で、外面に芭蕉葉文、内面は無文である。**35**は龍泉窯青磁碗胴部片で、外面に鎧蓮弁、内面は無文である。胎土は灰色で、釉は淡緑色である。**36**は同安窯青磁皿底部片で、内面に櫛目文、外面無文である。胎土は灰色で、釉は淡緑色である。底部は釉がカキ取ってある。 (織田)

第3節 検出された遺構の概略（第12図 第5表）

龍王遺跡倉地川地区で検出された遺構は第12図にあるように前方後円墳をはじめとする7つの遺構とピット群である。切り合い関係や出土品の相対的な関係から、古いものから並べると第12図の凡例に示すようになる。**SB 3**は56pで紹介するように前方後円墳の周隍覆土を取り除いた後に周隍底面で確認できたピットにより構成されており、古墳より古いことは明確である。さらにピットからの出土遺物には縄文土器片を含んでいるため、縄文時代までさかのぼる可能性が高い。**SK 2**は53pで紹介するように集石であり、遺構検出面である黄褐色土層中に入り込んでいる礫もあることから、土層の年代である縄文時代前期に属する可能性が高い。**方形周溝墓**は16pで紹介するが、埋葬施設が確認されず年代を決定する材料に乏しいが、周溝出土遺物には前方後円墳周隍出土品にみられるような須恵器片を含んでおり、前方後円墳の築造とそれほど時間的な差はないものと考えられる。前方後円墳は19pで紹介するように6世紀代後半ころに築造され、7世紀代にかけて追葬が行われたものである。**SK 1**は52pで紹介するが、平安時代の典型的な土師器塊（副葬品）が原位置に近い状態で検出されている。また前方後円墳の脇に位置することから、古墳の墳丘がまだ存在した時期に埋葬が行われている可能性が高い。**SB 1**および**SB 2**は54～55pで紹介するように、**SB 2**は前方部周隍が埋没した後に掘られた柱穴から構成されている。その主軸は古墳の軸に近くN—11°—E、前方部の墳丘に極めて近い位置にある。前方部の墳丘が崩壊していく段階に、古墳の残丘に規制されながら建造された建物と考えられる。ピット群については、平面的な検討のみしか行えなかつたので、詳細な状況は報告できない。前方部前面と前方部北側に広がっており、重複するものは少ない。覆土は**SB 1**や**SB 2**などと同じように黒褐色土であり、出土遺物はほとんど見られなかった。前方後円墳の周隍に切られるものと、周隍覆土取り除き後に検出されたものなどがある。各ピットの覆土の詳細な観察や比較などが十分にできなかつたために、建物などの復元まではできなかつた。（竹中）





第12図 倉地川地区検出遺構平面図(1/200)

第5表 検出遺構一覧表

遺構番号	規模	方向	桁行(実長)	梁行(実長)	方位	床面積	備考
前方後円墳	30m	東	—	—	E 8° S	—	
土坑墓	1.9m	東西	—	—	E 12° S	—	
SB01	3間×1間	南北	4.5m(約15尺)	2.85m(約9.5尺)	N11° E	12.8m	
SB02	3間×2間	南北?	5.3m(約17尺)	3.4m(約11尺)	N11° E	18.0m	棟持ち柱
SB03	3間×2間以上	南北?	6.3m(約21尺)	3.3m以上(約11尺以上)	N23° E	20.8m	

第4章 方形周溝墓と前方後円墳

第1節 調査区の設定と目的（第13・14図）

（1）方形周溝墓の調査区設定（第13図）

方形周溝墓に関する調査区の設定は次の三点の目的を中心に行った。

- ①平面形態の確認
- ②埋葬施設の検出
- ③周溝の検出

①については調査当初からほぼ正方形に溝がめぐる平面プランが確認できた。南西側コーナーから南辺にかけて一部途切れており、周溝は全周せずに南西側で途切れることが確認できた。

②については調査当初からほぼ中心となる位置で、周溝の平面プランからほぼ45度傾く向きで長方形プランの礫敷きが確認できた。当初はそれが当墓の埋葬施設と思われたが前方後円墳の調査が進むにつれ、それは前方後円墳の埋葬施設であることが明瞭となった。そのため、古墳の埋葬施設の調査終了後に当墓の埋葬施設の検出作業を行ったが発見されなかった。このため当墓には、埋葬施設が構築されないまま前方後円墳に移行したのか、それとも古墳の築造により埋葬施設が破壊されたのか、重要な課題が提出された。

③については周溝内にA～Nの調査区を設定し、覆土の状況や土器の出土状況などの確認を目的に調査を行った。その結果、周溝は埋没した後に南辺で再び掘削され大型の礫が入れ込まれていることが判明した。この部分は古墳の埋葬施設の開口部分にあり、古墳の埋葬施設が構築される際には、周溝は半分ほど埋まっていたことが判明した。

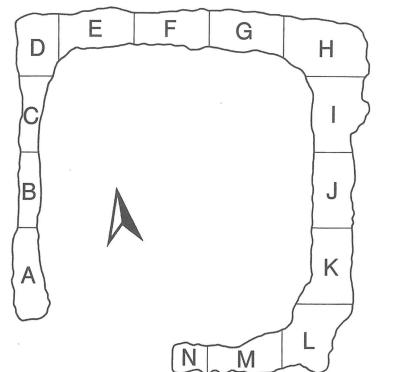
（2）前方後円墳の調査区設定（第14図）

前方後円墳に関する調査区の設定は次の三点の目的を中心に行った。

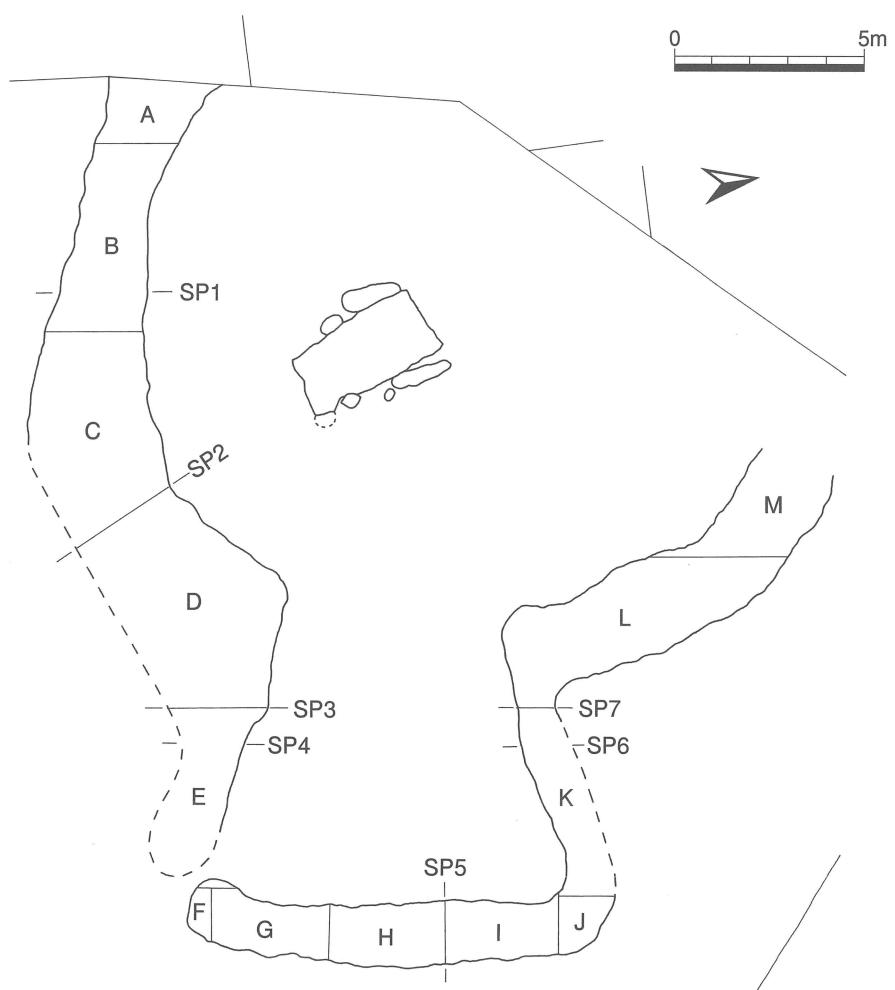
- ①墳丘形態の確認
- ②埋葬施設の検出
- ③周隙の検出

①については、調査前の段階からすでに墳丘が削平され畑地として利用されていたので、周隙の検出を行い、墳丘形態の把握に努めた。その結果、後円部が左右対称とならない前方後円形となることが判明した。

②については、調査当初方形周溝墓の埋葬施設として認識していたものが、当墳の埋葬施設であることが判明した。方形周溝墓の埋葬施設は当墳の埋葬施



第13図 方形周溝墓の調査区(1/200)

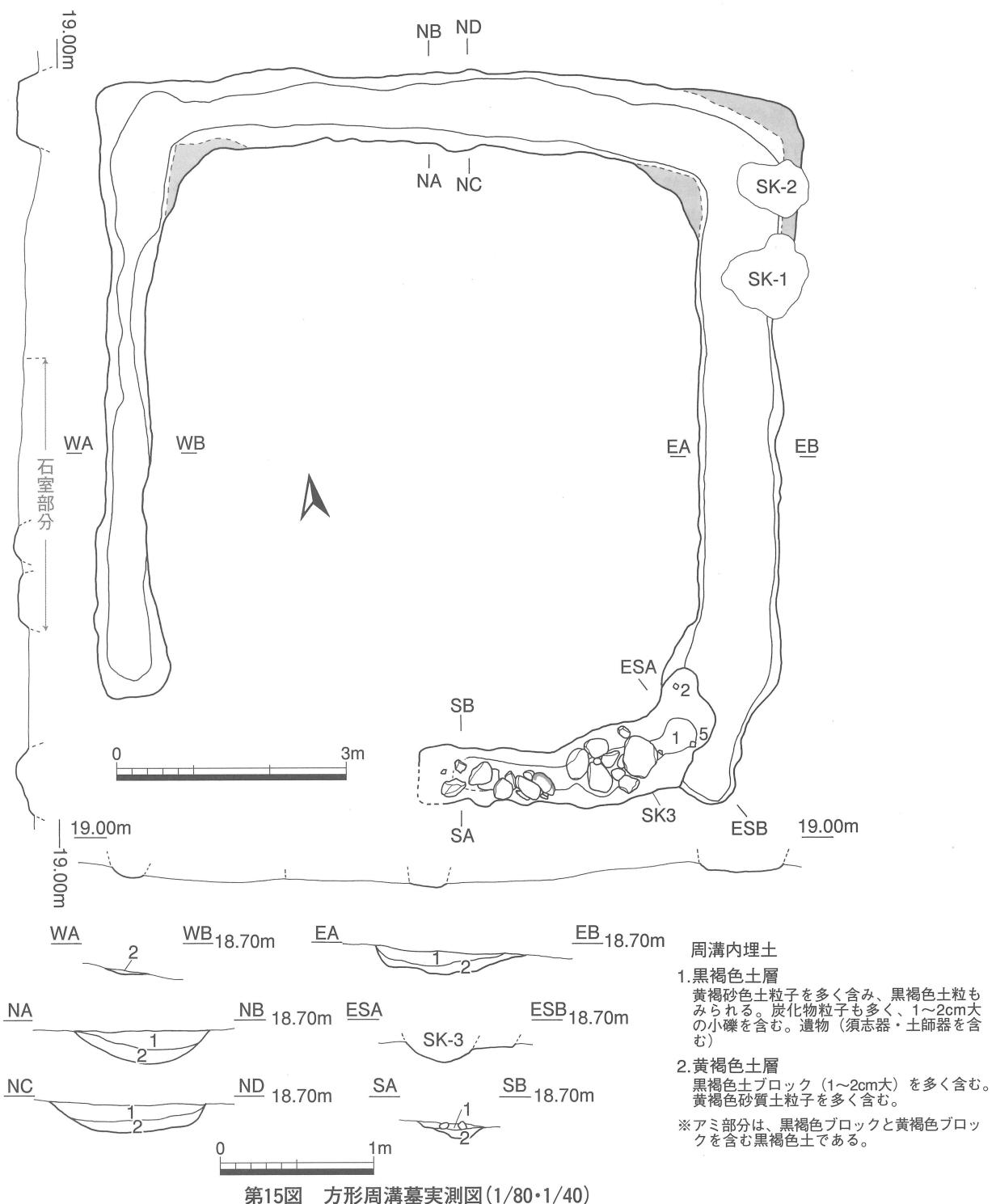


第14図 前方後円墳の調査区(1/200)

設を構築する際に破壊された可能性が高いことが判明した。埋葬施設に利用された石材などはすでに失われていたが、床面付近が良好に残っており副葬品なども検出できた。そのため埋葬施設の形態は南東方向に開口する单室構造の横穴式石室であることが判明した。③については周隣内にA～Mの調査区を設定し、周隣覆土の状況や土器等の出土状況を把握することを中心に調査を行った。最後に調査区全体を10cmセンターで1/20縮尺で測量し、墳丘形態の詳細なデータの把握に努めた。（竹中）

第2節 方形周溝墓（第15・16図 第6表 図版2・3）

(1) 方形周溝墓（第15図 図版2）



第15図 方形周溝墓実測図(1/80・1/40)

方形周溝墓は平面プランがほぼ正方形で、主軸はN—11°—E、東西幅9.2m、南北幅9.3mである。墳丘はすでに削平されており確認できなかった。周溝の断面形は逆台形で、底面は平坦となる部分が多い。検出面の周溝規模は、西辺が長さ8.1m幅0.48~0.95m、北辺が長さ9.22m幅0.8~1.1m、東辺が長さ9.28m幅1.4~0.92m、南辺が長さ4.22m幅0.76~1.0mとなり、南辺西半分が途切れた形となる。南辺は古墳を構築する際に大部分が掘りなおされているよう、当初の形態がどのようなものであったのかは詳細にはわからない。しかし、南辺西端は当初の状態を保っているものと思われるの、南辺は当初から中央付近から西側が途切れて土橋状となっていたことが想定できる。

隅は北西隅でほぼ直角にまがり、北東隅ではやや鈍角になる。西辺の南端はほぼ方形となり、東辺の南端もほぼ方形であったと思われる。北辺両隅の内側には周溝の覆土とは異なる土層（第15図のアミで示した部分）が確認でき、掘りすぎた部分を埋める目的で墳丘を盛る時点につぎ足したものと思われる。東辺隅外側でも同じ土層が平面的に確認できた。その土層は黒褐色ブロックと黄褐色ブロックを混入した暗褐色土で比較的しまりがよいものである。墳丘を構築する際に土台として必要な部分に行った土木作業の痕跡であろう。北東隅外側にも確認できる為、これも同様な痕跡であろう。

底面の形状は検出面に沿うように方形になり、底面は平坦である。その平坦な面の標高は、西辺南端18.507m中央18.472m、北辺西端18.337m中央18.384m、東辺北端18.476m中央18.50m、南辺東端18.53m中央18.35mである。各辺共に比較的底面の標高は揃っており、東・西両辺が高く、南北両辺が低くなっている、その差は10cm以内である。底面の幅は西辺中央に最も狭い部分があり約20cm、東辺に最も広い部分があり約80cm、ほかは60cm前後となる。

周溝の覆土は二層確認でき、その上層では須恵器甕片や土師器甕片が検出されている。上層は黒褐色土を基調とし、黄褐色軟質土の硬化粒子を多く含み、黒褐色土粒子も多く、炭化物粒子を多く含んでいる。また、円礫（1~2cm）を含み、遺物は縄文土器片や須恵器片・土師器片が検出されている。土器破片数は総数で35点ほどあり、B区1点、E区2点、F区3点、G区5点、I区2点、J区4点、K区1点、L区16点、M区1点となる。第16図には器形や形態の特徴的なものを図化している。但し、L区には土坑がありその土坑からの出土品がほとんどである為、周溝の埋没時期に関する遺物はL区以外の出土品で最も新しいもの（第16図3・4・8）である。下層から縄文土器は若干見られるが、土師器片・須恵器片の検出はない。黄褐色土層を基調とし、黒色土ブロック（1~2cm大）を多く含み、黄褐色軟質土の硬化粒子を多く含んでいる。比較的やわらかな締まりのない土質となる。

第6表 方形周溝墓出土土器観察表

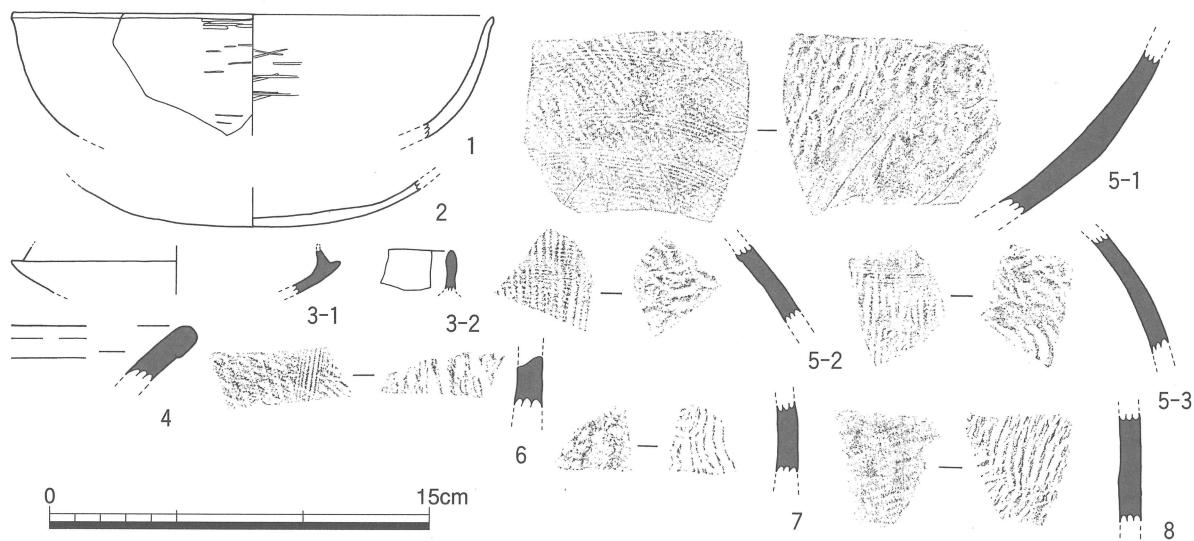
図	番号	種別	法量(cm) (復元径)	技法的特徴	胎土/色調	備考
16	1	土師器 壺	口縁部直径 高さ	外面 横ナデ 内面 横ナデ	角閃石、白色・雲母粒子 橙(Hue2.5YR7/8)	表面の化粧土は赤く発色する。
	2	土師器 壺(底部片)	残存高	外面 ヘラ削り後丁寧なナデ仕上げ 内面 ナデ仕上げ	雲母・白色粒子 外面:橙(Hue7.5YR7/6) 内面:浅黃橙(Hue7.5YR8/4)	
3-1	須恵器 壺(底部片)	口縁部 残存高	13 1.8	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白・黒色粒子目立つ 灰(Hue7.5Y6/1)	
	3-2	須恵器 壺	残存高	1.5	外面 横ナデ 内面 横ナデ	白色粒子 灰(HueN5/)
4	須恵器 甕	口縁部直径 (復元径) 残存高	10程 2.2	外面 横ナデ 内面 横ナデ	石英、白色粒子多い 外面:黒い 内面・内部:灰(HueN5/)	
	5	須恵器 甕	残存高	1 2 3 3.2	外面 斜方向擬格子叩き痕後 内面 斜位に同心円当て具痕跡 左上半:ナデ消し	石英、白色粒子 外面:灰黄(Hue2.5Y7/2) 内面:にぶい橙(Hue7.5YR)
6	須恵器 甕	残存高	2.1	外面 平行叩き工具痕 内面 平行當て具痕	黒・白色粒子多い 外面:黒 内面・内部:灰白(Hue5Y7/1)	
	7	須恵器 甕	残存高	2.8	外面 平行叩き痕 内面 同心円當て具痕	白・黒色粒子多い 灰白(Hue5Y7/1)
8	須恵器 甕	残存高	4.4	外面 平行叩き痕 内面 同心円當て具痕	白色粒子多い 青灰(Hue10BG5/1) 内部:小豆色に近い	

土層の堆積状況はいずれもレンズ状に堆積している。周溝壁の傾斜は内部が急でおよそ48~50度、外側がゆるくおよそ35~37度となる。北側の断面では下層は外側からの流れ込みが主体で、上層は内側からの流れ込みが主体となる。東側と南側では上層は内側からの流れ込みが主体で、上層は外側からの流れ込みが主体である。このことから周溝覆土には下層は方形周溝墓墳丘の崩壊土を含み、上層には古墳構築に際して周溝埋没の為の土砂を含んでいることが想定できる。

L区からM区にかけて掘り込まれた土坑（SK3）について、L区およびM区でははっきりそのプランと下場が確認できたが、N区においてはあいまいな部分が多かった。この土坑の特徴は次の三点。
①周溝よりも深く掘りこまれている点。
②周溝上層の覆土と似た覆土が入っており区別が難しい点。
③拳大、人頭大、50cm大の角閃石安山岩（円礫）が入れ込まれている点。礫には一部で赤色顔料の付着（第15図でアミをかけた部分）が確認できた。出土品は土器片があり、第16図に示した1・2・5~7である。最も大きい礫の上場は18.606mとなり、周溝底面より高く、検出面とそれほど差がみられない。さらに周溝よりも幅広に掘り込まれており、周溝の主軸とも合っていない。むしろ後述する横穴式石室の開口部に垂直となるような方向に長軸をもっている。以上のことからこの土坑は周溝埋没後に掘り込まれ、礫を投げ込み、土器片を含んだ土砂ですぐに埋め戻したことが想定できる。その再掘削の時期については、土坑内で出土している土師器片・須恵器片が、前方後円墳の周隣D区で出土している土師器・須恵器と類似する点が多いことが参考となる。周隣内からは浮いた状態で土師器・須恵器・人骨・装身具類が出土しており、それらは墳丘および石室が人為的に崩壊された産物と考えられる。この土坑もその崩壊の時か、それよりも新しい時期に掘削され埋め戻されたものと考えておきたい。

(2) 方形周溝墓出土遺物（第16図 第6表 図版3）

第16図は方形周溝墓から出土した土器片の実測図および拓本である。出土位置は1・2・5~7がL区、3がI区上層、4がG区上層、8がE区上層である。なかでも1・2・5はL区からM区にかけて掘り込まれた土坑（SK3）内に図化した遺物である。従って、方形周溝墓の埋没時期に関するものは3・4・8の3点、土坑（SK3）の埋没に関するものが1・2・5~7の5点である。1・2は土師器片で、口縁端部が外反し、底部は平底に近い丸底となる形態で、周隣で出土しているものと類似する。口縁部直径は復元で19cm、器高は6~7cmとなり、内外面はナデ仕上げであるが、部分的にミガキの痕跡が確認できる。低部外面はヘラ削りの後、ナデ仕上げである。2は器壁が薄く仕上げられており、1とは別個体と思われる。3-1は須恵器片で、復元で直径13cm、返りは高く



第16図 方形周溝墓出土土器(1/3)

なく、受け部もそれほど張り出さない形態である。3～2は壺身の立ち上がり部分の破片で、高さは約1.5cmあり、ほぼ垂直に立つものと思われる。表面採集品にあるようにやや古い形態の壺身に属するものである。4～8は須恵器甕片である。4は口縁部片で単純な形態である。端部は外側に折り曲げ、断面が丸くなる。直径は10cm程度か？それほど大型のものには復元できない。5～8は胴部片で、5以外の小片は傾きや部位の判断が難しい。5は胴部下半と思われ、外面には叩き調整（擬格子）の後に横方向の粗いカキ目を施している。内面は同心円文の当て具痕が密にあり、その上から部分的に強いナデ調整が斜位に施される。6は厚みのある胴部片で外面は黒色となり、他の胴部片とは仕上がりが異なる。外面の調整痕は平行叩き工具痕が二重になっており、その上から幅の狭いカキ目、ナデなどがあり複雑である。内面は平行当て具痕である。また、内面上面の割れ口が非常に滑らかになっていることから、粘土紐の単位で割れているものと思われ、幅はおよそ2cm厚さ1cmである。7は外面が大部分剥離しているが平行叩き痕、内面は同心円文当て具痕が密に観察できる。8は内部が小豆色となる特徴的な資料で、外面平行叩き痕、内面は同心円文当て具痕が密に観察できる。（竹中）

第3節 前方後円墳（第17～42図 第7～14表 図版2～11）

（1）墳丘形態の確認（第17図）

検出された前方後円墳は、後円部西側を失っており詳細な形態はつかめなかった。また、墳丘および埋葬施設がすでに失われていたので正確な墳丘規模の把握も難しい。そのため、周隣の検出・測量によりその形態や規模を類推するのみであった。第17図は周隣および検出面を10cmセンターにより1/20測量した図である。周隣の掘り方になる部分を太めの線で表現し、コンターラインは細めの線で表現している。周隣内部以外は、遺構検出作業のために本来の検出面よりも若干（5cm程度）下がった面での測量であることを付け加えておく。また、後円部中心には横穴式石室の床面と石材の痕跡を加えている。前方部北側の点線で表現した範囲は、後世の搅乱がみられた部分である。また、南側くびれ部付近では周隣の掘り込み部分が緩傾斜であったため掘り方の認定が難しく点線で表現している。

全体的な地形の傾斜は東から西へ傾いており、周辺の測量図（第17図）から50mで3～4m西へ傾斜する地形に復元できる。当墳はその傾斜に平行して後円部を西側へ向け、前方部を東側へ向けている。

墳丘形態をもっとも端的に表しているセンターは18.6mである。後円部南側から墳丘の裾を通りながら後円部中央へいたり、墳丘内部へ入り込み、再びくびれ部へ出て前方部へ進んでいる。前方部南側では直線的に伸び、土橋状となる前方部南端で旧地形に近いコンターラインとなり調査区外へのびている。このコンターラインが後円部で描くいびつな曲線がほぼ後円部裾の掘り方と一致している。南側周隣の掘り込み部分を端的に表しているセンターは18.5m・18.4mである。18.4mで始まり、後円部西側から3mほどで、18.5mが合流し周隣の掘りこみ部分の掘り方にそって進んでいる。そのラインはくびれ部から前方部へかけての部分では、墳丘に沿うようなものではなくゆるい弧を描いて前方部の土橋状の部分へ流れている。周隣がこの部分では広くなり平面プランでは相似形ではない形態であったことが推測できる。検出面でも周隣の認定が曖昧であったのはそのためであろう。

反対側の北側から18.6mを追いかけると、後円部からくびれ部へいたり、くびれ部で極端に入り込む部分があり、その後前方部の直線へ進む。このラインは墳丘の立ち上がり部分に沿っている。その後、前方部北側コーナーで周隣の内側を南に曲がり前方部前面を直進し、土橋状となる部分の直前で西側にゆるい弧を描き土橋にいたる。この一連のラインも墳丘の立ち上がり部分に沿っている。土橋からは周隣の掘り込みラインを沿うようにして前方部を北進し、コーナー直前で外側に大きく外れるが、再び戻りコーナーで西へ折れ曲がっている。曲がり方は2段階に分けて北側前方部へいたっている。前方部へ入ってからすぐに18.6mのセンターは北側へ広がり、周隣の掘りこみ部分とは異なる方向へ進んでいる。ここから先は18.5mへ周隣掘り込みの掘り方ラインが移っている。18.5mはくびれ

部に入り周隣に沿うようにして墳丘とほぼ同心円状の弧を描きながら後円部北側で崖面に途切れている。18.6mも同様な部分に収束しているので、もう少し丁寧な検出作業を行っていれば、18.6mも周隣の掘り込み掘り方ラインに沿っていたのかもしれない。

上記のコンターラインから導かれる全体的な形態と規模を紹介していく。後円部の周隣が左右非対称となることが、本墳のもっとも特徴的な点である。それに対して前方部は左右対称となり、くびれ部と前方部先端の中心線上に埋葬施設ものてくる。これを主軸とみるならば、若干南に振れる東向きの前方後円墳となる。検出面での周隣の状況で特徴的な点は、前方部南側が途切ることと、南側くびれ部にあたる部分の周隣幅が広がっていることである。前者は土橋状に掘り残した部分を用いて墳丘への通路としていたものと思われる。後者は北側くびれ部の周隣は墳丘と相似形にめぐっているのに対して、南側では盾形周隣状にめぐるものと思われ特徴的である。全体的な墳丘形態が設計当初から左右非対称であったことの傍証となろう。

周隣内の状況を説明していく。周隣内部で低い点は後円部南側に18.08m、その東に18.11mがあり、南側くびれ部で18.171m、後円部北側に18.271m・18.265mがある。前方部周隣内では中央となる部分で18.39mがあるが、後円部やくびれ部のように凹地となるようなコンターラインは確認できない。また、前方部南側コーナーへいたるコンターラインはいずれも土橋となる部分に対してゆるい傾斜を示している点が注目される。くびれ部南側のようにコンターラインが混雜するような様子ではない。また、周隣底レベルは南西側が相対的に低いことがコンターラインから読み取られる。この点は旧地形が東から西へ傾斜していることを考慮してのものと考えられる。旧地形を第3図で見てみると調査地点の畠地が19.17m、倉地川に面する西側の畠地が15.65mとなる。高低差約3.5mで水平距離は約50mであり、傾斜角は約4度である。この傾斜では当然地形的に高い部分にある前方部の旧地形のレベルと低い部分にある後円部西側のレベル差は2mほどとなり、古墳はその傾斜に左右されながら築造されたこととなる。

墳丘は削平され失われているが、その内部のコンターラインはどのようになるのであろうか？墳丘の基盤となる黄褐色土層上の測量であるため、墳丘内でどのような掘り込み作業が行われたのかを物語るコンターラインとなるものと考えられる。その典型的なものが墳丘内部にみられる石室をぐるりとめぐる18.6mと18.5mとの2本のコンターラインである。この2本は石室構築に際して掘り込まれたおよその範囲を規定できるものと思われる。この2本のラインが描く橢円形（長軸7.5m短軸6.0m）の中央に石室が最終的に構築され、18.6mの北西側へ広がる部分は大型石材の運搬作業のためのものかと考えられる。また、18.6mのくびれ部へ広がるラインは石室構築材の運搬の作業道、もしくは葬儀に際しての『道』の痕跡であろうかと考えられる。石材痕跡は18.4mのラインが描く範囲内に収まっており、石材を埋め込む際にも基盤土層への掘削がなされたことを物語っている。

前方部側の墳丘では18.77mを最高点とする18.7mセンターが前方部南側へ接して大きくめぐっており、前方部コーナーまで続いている。いま、18.8mを墳丘の基盤レベルと仮定すると、石室が構築されている部分はその20~30cm低い部分にあり、前庭から一段低い位置に石室床面が位置することになる。この点は石室の項で詳細に検討するが、当横穴式石室の特徴の一つとなろう。

上記の内容が墳丘を失っていた前方後円墳の測量図を分析した成果である。これらの分析をもとに、次のように当墳の規模を類推しておきたい。規模の類推には次の二つの場合を考えてみた。前方部中軸線上に後円部の中心が位置する場合（第17図小さい●印）、石室中軸線上に後円部の中心が位置する場合（第17図▲印）。いずれの場合も前方部幅は約10m、くびれ部幅は約5.6mである。前方部主軸は前者の場合は後円部北側の円弧を満たす正円の半径が11.6mとなり、くびれ部で重なる部分を除いた前方部の長さが7.2mとなり、全長は30.4mに復元できる。この場合には後円部の平面的な形態は南側が橢円形となり、北側は正円となるいびつな形に復元される。しかし、二段築成の前方

後円墳であるならば基盤となる平面形態よりも二段目の形態に重点がおかれるであろうから妥当な復元案であろう。後者の場合は後円部の中心を石室中軸線上へおいた場合の復元案である。この点を後円部の中心にすると北側と南側の非対称な点を解消できる。この場合にはこの点を中心とした後円部の半径は8.7mとなり、全長は25.4mとなる。この中心点と前方部先端の中心とを結んだ線と、前方部の中軸線とは6度30分のずれが生じ、妥当な復元案とはいえないであろう。

(竹中)

(2) 埋葬施設と副葬品

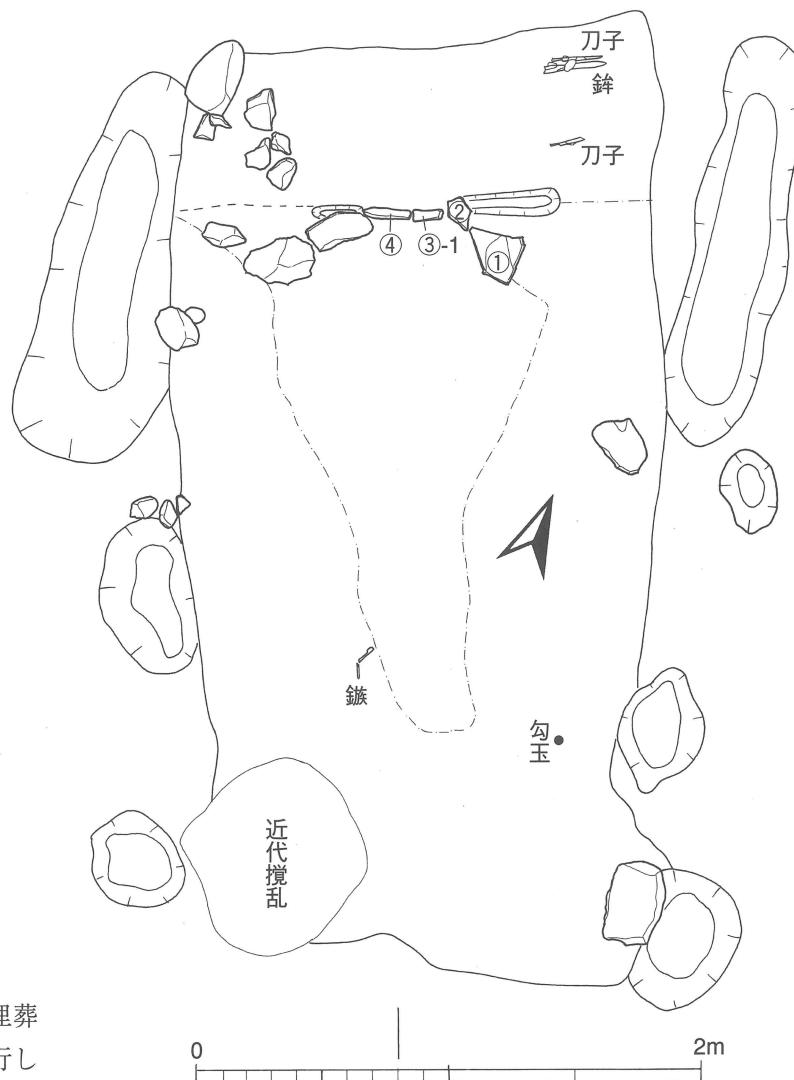
(第18~21図)

埋葬施設の検出

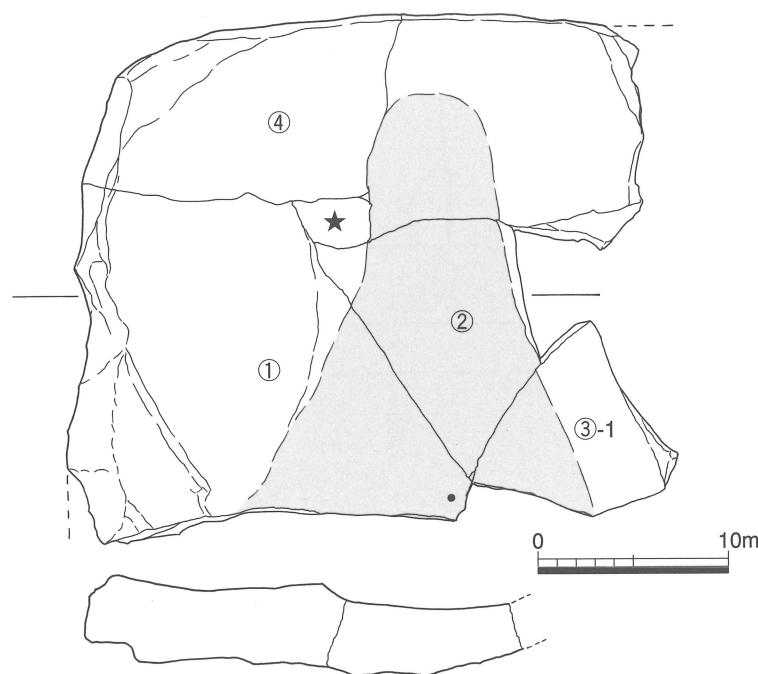
(第18・19図 図版3)

調査の契機と期間の都合上、埋葬施設の検出と周隣の検出とは平行しながら行うこととなった。調査当初

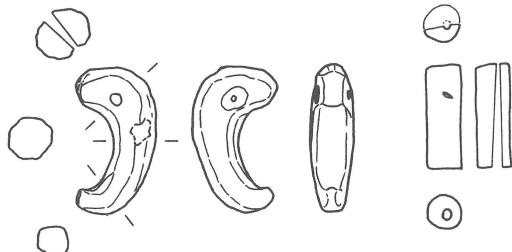
(周隣検出前)は方形周溝墓の埋葬施設として認識していた為に、開口方向などの調査意識が薄かったが、前方後円形の周隣が検出されてのちは横穴式石室としての認識が強くなった。埋葬施設の調査は、平面図(1/10)と周隣までの延長断面図(1/20)とを作成し、その形態および出土状態の把握に努めた。第18図は埋葬施設の平面図である。礫を敷いた長方形の範囲が床面で、その長側辺に沿うようにして大き目の長楕円形の窪みと円形の窪みが複数確認された。床面の規模は長さ3.6m、幅1.9mで、北側が広く南側が狭い羽子板状となっている。南側周隣で集中して発見された須恵器・土師器



第18図 埋葬施設平面図(1/30)



第19図 石室石障転用凹石(1/4)



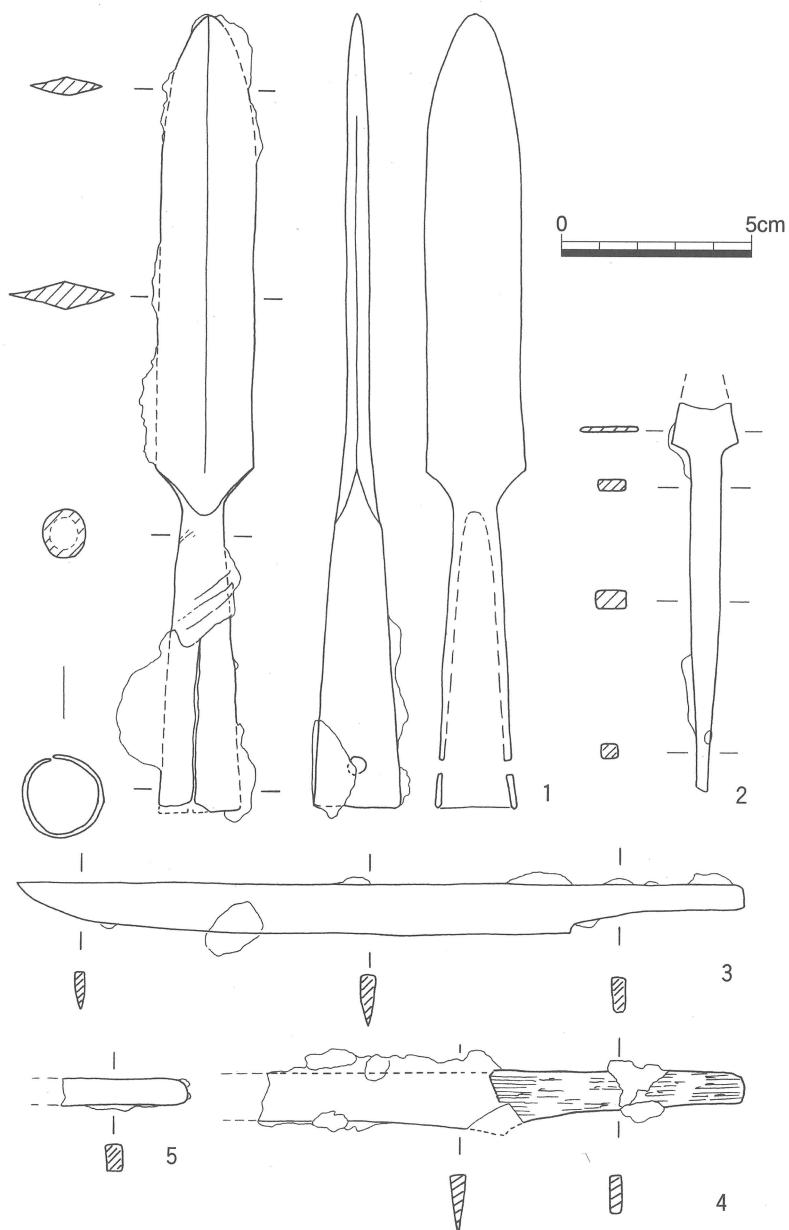
第20図 副葬品（装身具類2/3）

を考慮すると、南側が開口部に復元できる。開口方向と磁北とのずれは、S-24°-Eであり、埋葬施設の主軸は第17図「石室主軸線」である。奥壁側には床面を仕切る板石（石障）が立てられており、長さ1.9m幅65cmの屍床をなしている。その中の東寄りの位置に副葬された状態で鉄製の武器（鉾）と工具（刀子）が切っ先を東に向けて検出されている。奥壁西寄りでは扁平な礫4個程が検出され、枕石の代用かと思われる。

このため、屍床の埋葬頭位は西と考えられる。

奥壁側の屍床部分以外は礫敷きの乱れがあり、副葬された当初の位置での遺物の検出はなかった。開口部近くで勾玉と鉄鏃（21図-2）と鉄製品（21図-5）が床面上で検出されている。横穴式石室内へ複数の遺体が搬入されたことは、出土土器の形式的な幅からも想定できる。

第19図は石障として利用されていた砂岩製の凹石の実測図である。破片番号は第18図に対応する。



第21図 副葬品（鉄製品1/2）

黒丸部分（●印）は厚さ1.4cmとなる。中央（★印）の破片1点は周墳C区からの出土であり、石室内の土器などと共に周墳へ入れ込まれたものであろう。（竹中）

副葬品（第20・21図）

第20図は勾玉と管玉の実測図である。勾玉は石室床面の第18図に示した位置から寝た状態で出土している。副葬された位置ではなく、礫石の乱れに左右された状態での出土である。管玉は南側後円部周墳で土器の集中部分で出土している（第22図）

勾玉は瑪瑙製で全長3cm、頭部幅0.8cm。重量は約7g。全体的に面取りが施されており、断面形に明瞭に現れている。研磨は丁寧であるが、頭部には自然孔が一つみられる。穿孔は片側からのみ行われ、径は上約0.2cm、下約0.1cm。下面是穿孔のために橢円形に剥落している。

管玉は硬玉製で、全長2.1cm、径約0.7cm、一部が欠けている。色調は深い緑色で不透明である。実測図で示すように穿孔は片側のみから行われ、径は上約1.9mm、